

平安京右京三条一坊三・六・七町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊三・六・七町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。平成14年度の第5冊目として、このたび二条駅周辺再開発に伴います平安京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

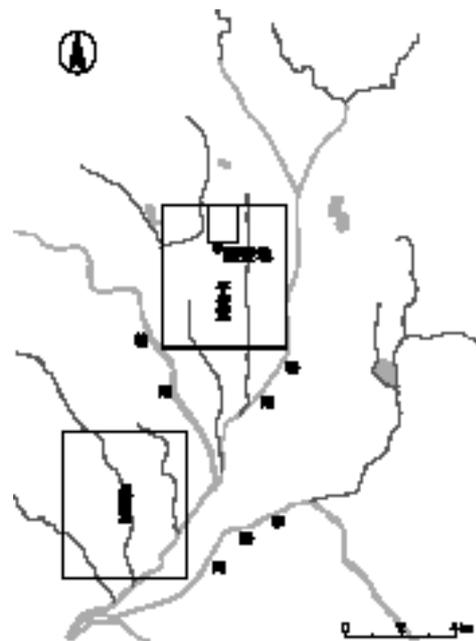
平成14年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条一坊三・六・七町跡
- 2 調査地点所在地 京都市中京区西ノ京小倉町・星池町地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 15次調査：2000年11月1日～2000年12月22日
16次調査：2001年12月20日～2002年2月28日
17次調査：2002年1月21日～2002年4月12日
- 5 調査面積 15次調査：400m²、16次調査：508m²、17次調査：162m²
- 6 調査担当職員 15次調査：平尾政幸・山口 真
16次調査：本 弥八郎・山口 真
17次調査：山口 真
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 瓦類、土器類および土製品、木製品ごとに通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 13 作成担当職員 本 弥八郎・平尾政幸・
山口 真
- 14 自然遺物の分析 環境考古研究会に依頼した。
- 15 本書の作成に当たり井上満郎氏、西山良平氏より有益な御教授をいただいた。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
(1) 15次調査	3
(2) 16次調査	6
(3) 17次調査	7
2 . 遺 構	12
(1) 平安時代の遺構	12
(2) 近世以降の遺構	14
3 . 遺 物	15
(1) 瓦 類	15
(2) 土器類	19
(3) 土製品	28
(4) 木製品	29
(5) 金属製品	32
4 . 自然遺物の環境考古学分析	33
(1) 花粉分析	33
(2) 珪藻分析	35
(3) 樹種同定	36
(4) 種実同定	39
(5) 小 結	41
5 . ま と め	48

図 版 目 次

図版 1 遺構	1	15次調査六町地区全景（西から）
	2	16次調査三町地区全景（北西から）
図版 2 遺構	1	16次調査三町地区SF12（西から）
	2	SA11の瓦落ち 文字瓦出土状況（北から）
	3	SD09（西から）
図版 3 遺構	1	16次調査七町地区全景（北から）
	2	SA21の瓦落ちがSD18・19上面を覆う（西から）

図版 4	遺構	1	17次調査六町地区全景 SG24新（北から）
		2	17次調査六町地区全景 SG24旧（北から）
図版 5	遺構	1	17次調査六町地区SG24新洲浜（北西から）
		2	SG24新洲浜護岸（北東から）
		3	SG24旧洲浜（北西から）
図版 6	遺物		軒丸瓦・軒平瓦
図版 7	遺物		軒平瓦
図版 8	遺物		鬼瓦・鴟尾・文字瓦
図版 9	遺物		SD19出土土器 1
図版10	遺物		SD19出土土器 2
図版11	遺物		SD19出土土器 3
図版12	遺物		SD19・SG24旧・SG24新出土土器
図版13	遺物		SG24新・Pit25出土土器
図版14	遺物		木製品
図版15	自然遺物		花粉・寄生虫卵
図版16	自然遺物		珪藻 1
図版17	自然遺物		珪藻 2
図版18	自然遺物		木材 1
図版19	自然遺物		木材 2
図版20	自然遺物		木材 3
図版21	自然遺物		種実

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	六町地区調査前全景	3
図 4	調査風景	3
図 5	16次調査三町地区遺構実測図（1：200）	3
図 6	15次調査六町地区遺構実測図（1：200）	4
図 7	15次調査六町地区西壁断面図（1：100）	4
図 8	15次調査六町地区北壁断面図（1：100）	5
図 9	16次調査三町地区東壁断面図（1：50）	6

図10	16次調査七町地区遺構実測図(1:200)	7
図11	16次調査七町地区東壁断面図(1:50)	8
図12	17次調査六町地区東壁断面図(1:50)	9
図13	17次調査六町地区SG24旧実測図(1:100)	10
図14	17次調査六町地区SG24新実測図(1:100)	11
図15	軒丸瓦拓影・実測図(1:4)	15
図16	軒平瓦拓影・実測図(1:4)	16
図17	鬼瓦・鴟尾拓影・実測図(1:4)	18
図18	文字瓦拓影(1:4)	19
図19	SD19出土土師器・黒色土器実測図(1:4)	21
図20	SD19出土須恵器実測図(1:4)	22
図21	SD19出土製塩土器	23
図22	SD19出土弥生土器実測図(1:4)	23
図23	SG24旧出土土器実測図(1:4)	24
図24	SX05出土土器実測図(1:4)	25
図25	SG24新出土土器実測図(1:4)	27
図26	Pit25出土土師器実測図(1:4)	28
図27	SA11出土青磁実測図(1:4)	28
図28	SD09出土弥生土器実測図(1:4)	28
図29	SG24新出土土錘	29
図30	SD19出土木製品実測図(1:4)	29
図31	SG24新出土木製品実測図(1:4)	30
図32	SG24新出土飾り金具実測図(1:4)	32
図33	SG24新出土飾り金具	32
図34	花粉ダイアグラム	46
図35	主要珪藻ダイアグラム	47

表 目 次

表1	調査一覧表	2
表2	遺構一覧表	12
表3	文字瓦一覧表	19
表4	SD19出土土器破片計数表	20

表 5	SD19土師器法量分布	20
表 6	SG24旧出土土器破片計数表	23
表 7	SG24旧土師器法量分布	24
表 8	SG24新出土土器破片計数表	26
表 9	SG24新土師器法量分布	26
表10	SG24新出土土錘一覽表	29
表11	遺物概要表	31
表12	花粉分析結果	43
表13	珪藻分析結果	44
表14	樹種同定結果	45
表15	種実同定結果	45

付 表 目 次

附表 1	SD19出土掲載土器一覽表	51
附表 2	SG24旧出土掲載土器一覽表	55
附表 3	SX05出土掲載土器一覽表	56
附表 4	SG24新出土掲載土器一覽表	57
附表 5	Pit25出土掲載土器一覽表	59
附表 6	SA11出土掲載土器一覽表	59
附表 7	SD09出土掲載土器一覽表	59

平安京右京三条一坊三・六・七町跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、京都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）都市計画事業二条駅地区土地区画整理事業に伴うもので、同事業関連の調査としては1992年度から続く15次、16次、17次目の調査となる。調査対象地は中京区西ノ京小倉町・星池町に位置し、平安京右京三条一坊三町、六町、七町に該当する。三条一坊には一・二町と七・八町に穀倉院、三町に右京職が置かれた地であり、周辺のこれまでの調査で、それら官衙に関連する遺構・遺物が検出されている。また当地域は弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土する壬生遺跡の一部でもある。

15次調査と17次調査は平安京右京三条一坊六町に該当し、『拾芥抄』右京図によると右大臣藤原良相の第宅「西三条第」とされている。1995年度の8次調査では洲浜を伴う園池跡と考えられる池状遺構の東岸を、1998年度の14次調査では掘立柱建物や柵列を検出している。

16次調査は2箇所に分かれており、右京三条一坊三町と同七町である。三町の調査位置は町の北西隅とその北の三条坊門小路に、七町は町の南東隅とその南の三条坊門小路部分に該当する。三町は右京職に推定されており、1997年度に当調査区東側で実施した13次調査とその南側での調査¹⁾では建物、井戸、三条坊門小路などを検出し、右京職を裏付ける「右籍所」、「計帳所」などと

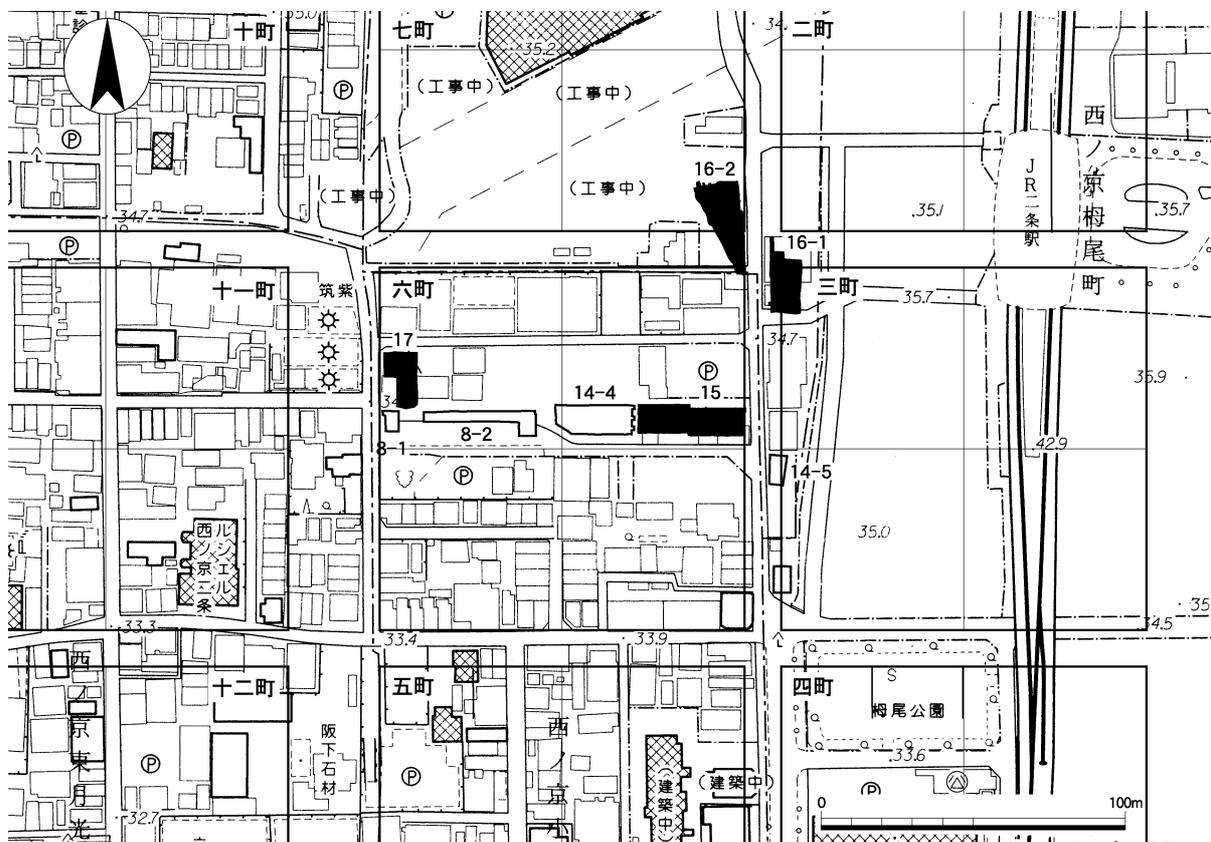


図1 調査位置図(1:2,500)

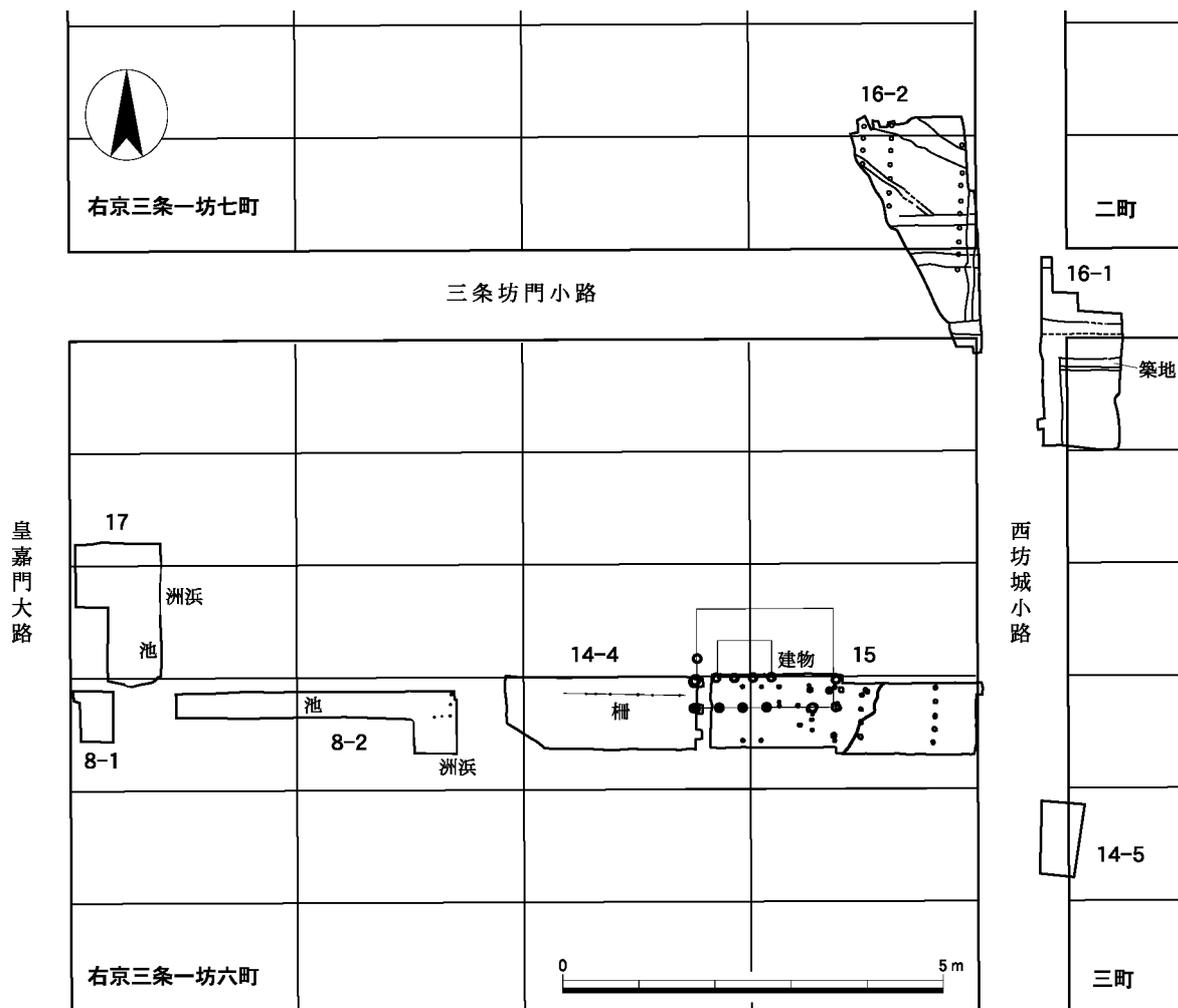


図2 調査区配置図(1:1,000)

表1 調査一覧表

年度	回数	遺跡名	所在地	調査法	面積	主な遺構
1992	1次	右京三条一坊八町	中京区西ノ京星池町	試掘	131m ²	溝、柱穴
1993	2次	右京三条一坊八町	中京区西ノ京星池町	発掘	800m ²	建物、溝
1993	3次	右京三条一坊七町	中京区西ノ京星池町	発掘	320m ²	建物、溝、井戸、土壌
1993	4次	右京三条一坊四町	中京区西ノ京梅尾町	発掘	364m ²	西坊城小路東側溝、姉小路南側溝
1993	5次	右京三条一坊一町	中京区西ノ京梅尾町	試掘	300m ²	二条大路路面
1994	6次	右京三条一坊三・四町	中京区西ノ京梅尾町	発掘	848m ²	池、姉小路路面、南北両側溝
1994	7次	右京三条一坊七町	中京区西ノ京星池町	試掘	175m ²	建物、溝、土壌
1995	8次	右京三条一坊六町	中京区西ノ京星池町	試掘	231m ²	池
1995	9次	右京三条一坊二・三町	中京区西ノ京梅尾町	試掘	247m ²	三条坊門小路両側溝、穀倉院、右京職関連建物
1996	10次	右京三条一坊七町	中京区西ノ京星池町	試掘	121m ²	皇嘉門大路東側溝、三条坊門小路北側溝
1996	11次	右京三条一坊七町	中京区西ノ京星池町	発掘	79m ²	穀倉院、右京職関連建物
1996	12次	右京三条一坊三町	中京区西ノ京梅尾町	発掘	296m ²	朱雀大路西側溝、姉小路北側溝交差部
1997	13次	右京三条一坊二町	中京区西ノ京星池町	発掘	1450m ²	三条坊門小路路面、両側溝
1998	14次	右京三条一坊三・六町	中京区西ノ京小倉町	発掘	313m ²	柱穴
2000	15次	右京三条一坊六町	中京区西ノ京小倉町	発掘	400m ²	建物、湿地
2001	16次	右京三条一坊三・七町	中京区西ノ京小倉町	発掘	470m ²	三条坊門小路路面、両側溝、右京職築地等
2001	17次	右京三条一坊六町	中京区西ノ京小倉町	発掘	162m ²	池



図3 六町地区調査前全景



図4 調査風景

記された墨書土器が出土している。また2001年度の調査²⁾では朱雀大路西側溝と築地を検出し右京職の東限が確定された。七町は穀倉院が置かれたとされる所で、1997年度に当調査区北側の2箇所³⁾で調査があり建物、井戸、池などを検出している。

(1) 15次調査

六町の調査

15次調査の基本層序は、上層から現代盛土層(50~60cm)、近世以降の耕土(10~20cm)、東半では湿地の堆積(10~30cm)、その下は黄褐色砂礫の地山である。遺構のほとんどは地山を切って成立している。

近世以降の遺構には溝、土壇、耕作関連の小溝群がある。

中世の遺構は確認されていない。

平安時代の遺構は掘立柱建物2棟、柵列、湿地状の落ち込みなどを検出した。なお、14次調査で確認された建物西端の南北柱列の北に確認トレンチを設定し、柱間3.3mの位置に柱穴を検出した。

調査区東端には西坊城小路西側溝の推定位置が含まれていたが、この調査では確認することができなかった。湿地との関係で側溝がもともと存在していなかった可能性もある。

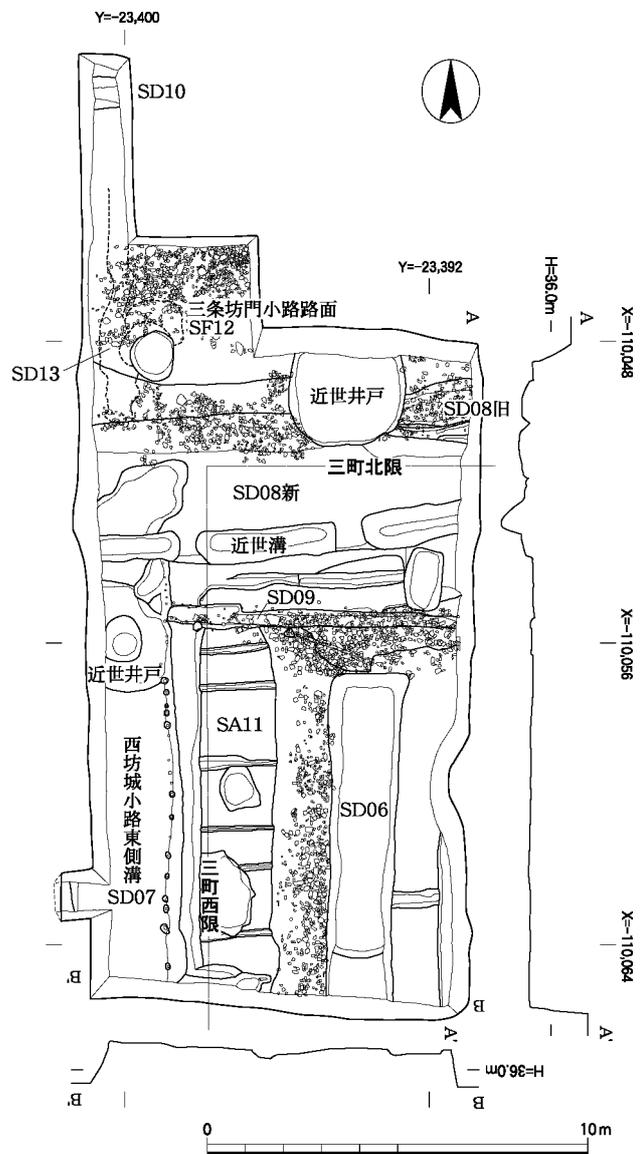


図5 16次調査三町地区遺構実測図(1:200)

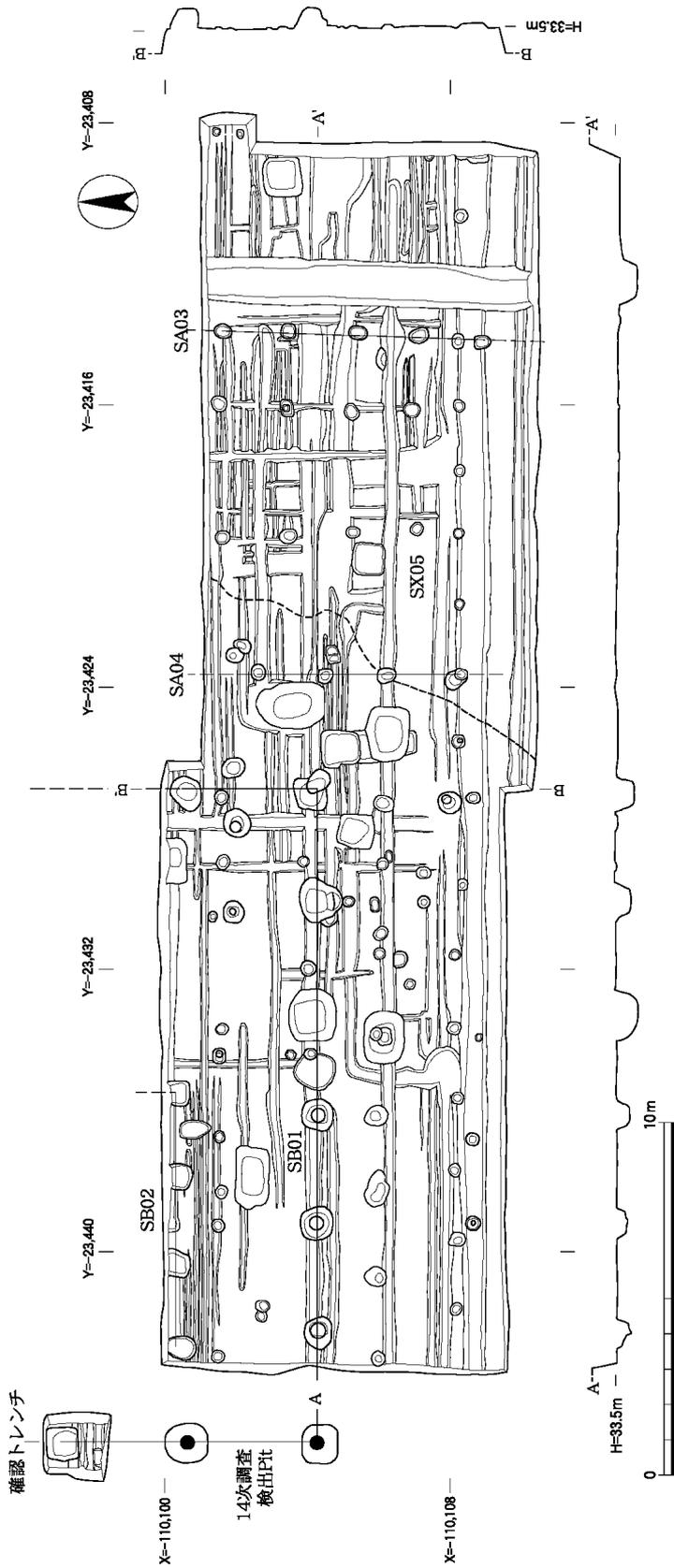


図6 15次調査六町地区遺構実測図(1:200)

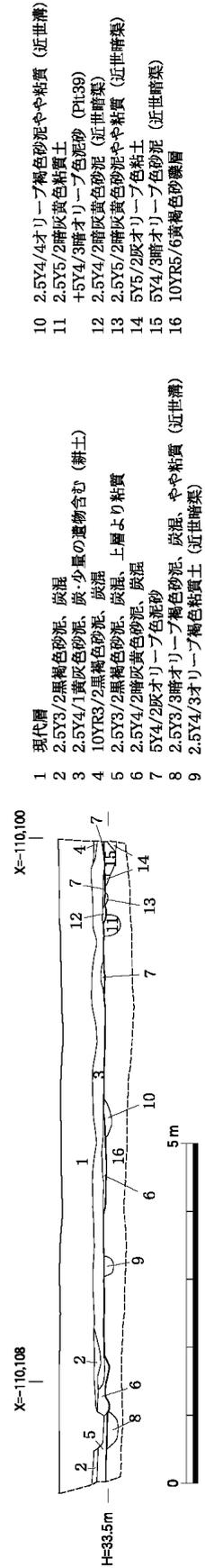


図7 15次調査六町地区西壁断面図(1:100)

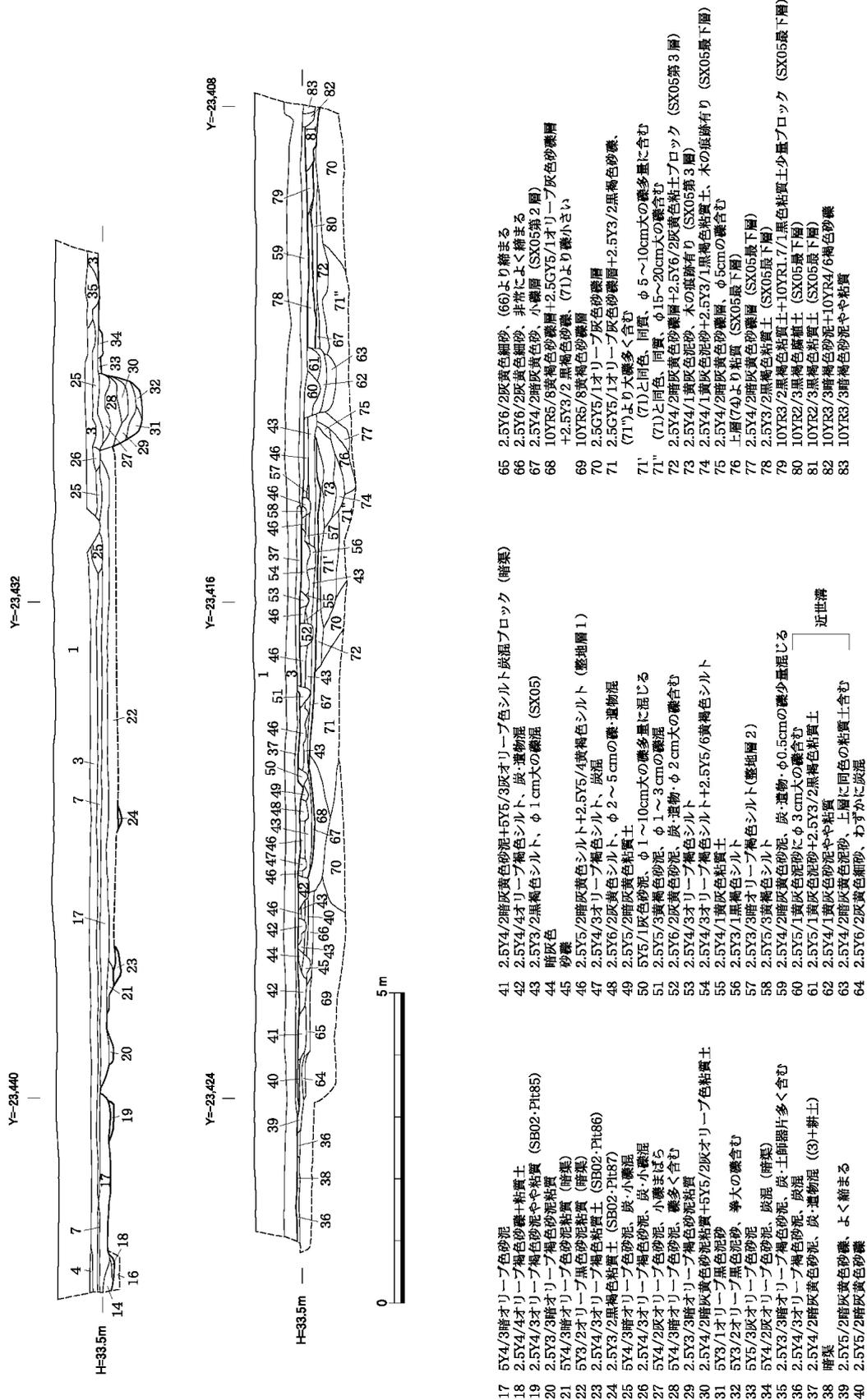


図8 15次調査六町地区北壁断面図(1:100)

(2) 16次調査

三町の調査

調査地の基本的な層序は、地表面から近・現代の盛土が60～80cm、近世から近代にかけての耕作土が約20cm、砂礫を含む固く締った暗オリーブ褐色砂泥の床土が約5cmの順に堆積する。この床土を除去した時点で平安時代の遺構が検出される。地山はオリーブ灰色シルトとにぶい燈色砂礫からなり、互層堆積を示す。

検出した近世以降の遺構は、耕作に関連する小規模な小溝群、井戸、土溝、溝などがある。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構には、三条坊門小路南側溝・路面と西坊城小路東側溝がある。

平安時代前期から後期にかけての遺構には、三町の西面築地、三条坊門小路路面・北側溝・南側溝などがある。

平安時代以前の自然流路は、調査区全体を北東から南西方向に延びる。堆積土は黒褐色の腐植土と砂礫の互層で、最も厚い所で0.45mある。

七町の調査

基本的な層序は、ほぼ三町地区と同じである。

近世以降の遺構には溝、柵、土溝、井戸、耕作関連の小溝群などがある。

中世の遺構は確認されなかった。

平安時代の遺構には掘立柱建物、南面築地、三条坊門小路南・北側溝、路面、築地内溝、土溝、瓦落ちがある。

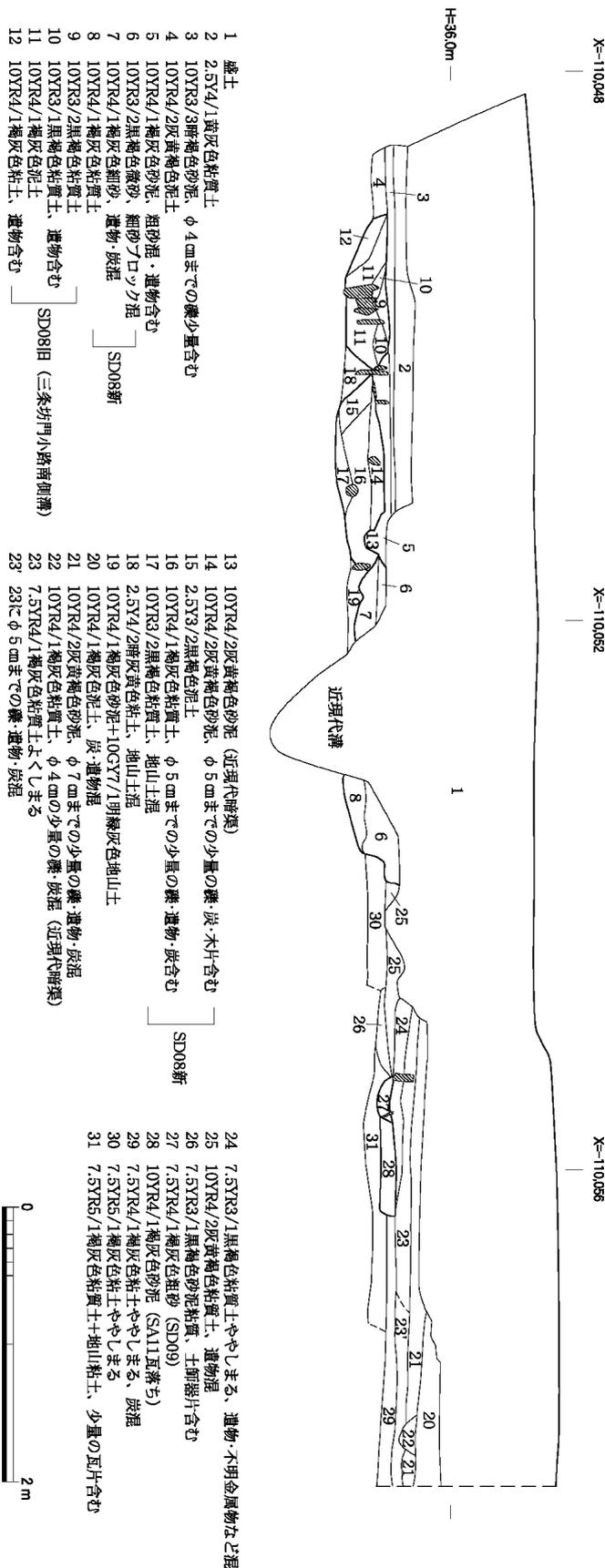


図9 16次調査三町地区東壁断面図(1:50)

(3) 17次調査

六町の調査

17次調査の基本層序は、上層から現代盛土層（1.0～1.2m）、明治時代以降の耕土（10～20cm）、近世耕土（20cm）、以下池の堆積土、青灰色砂泥の地山である。

近世の遺構は耕作関連の小溝が数条と土壌が1基である。

中世の遺構は確認されなかった。

この調査地では、8次調査によって確認された洲浜の約40m西にあたる位置で、対岸となる洲浜と池跡を検出した。池は9世紀初頭と9世紀後半の2時期あり、当初の池を縮小し改修を行った様子が確認された。

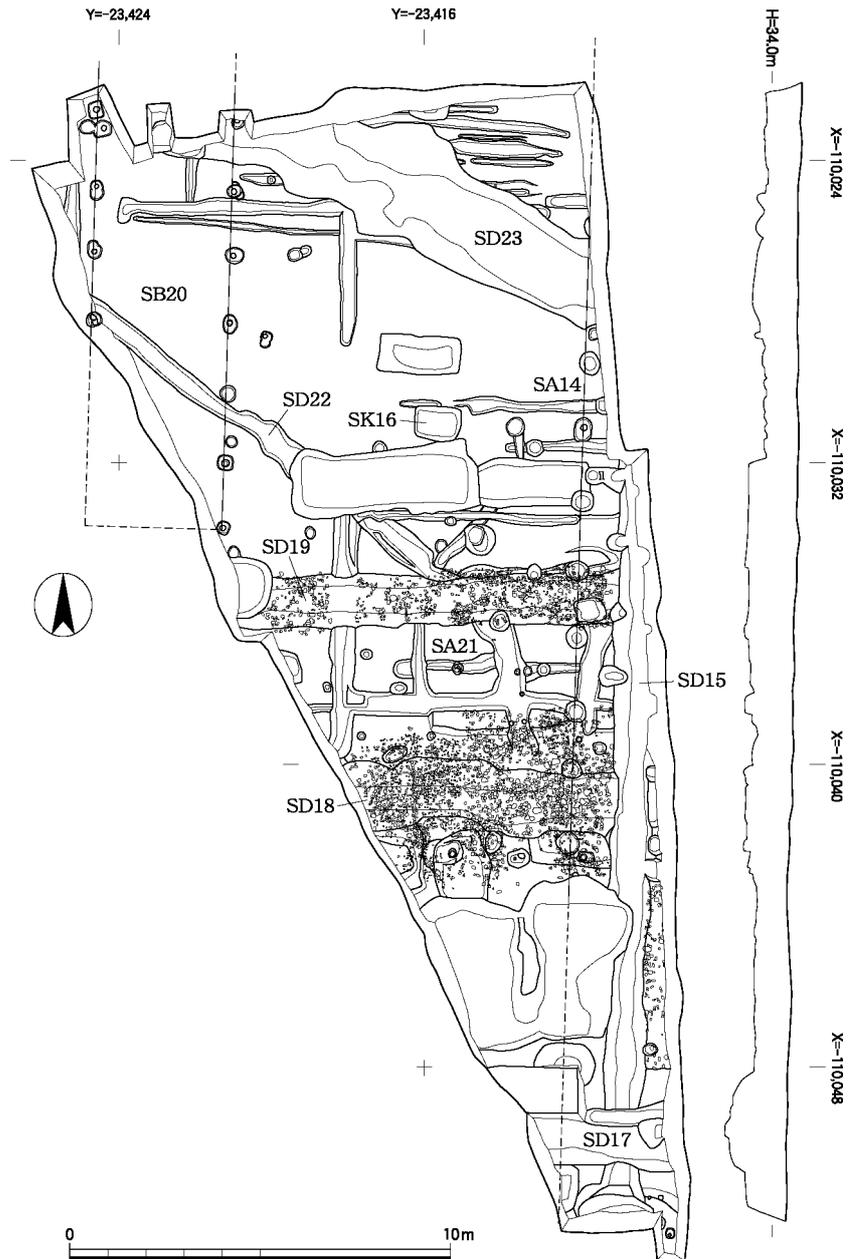


図10 16次調査七町地区遺構実測図（1：200）

註

- 1) 伊藤 潔「14 平安京右京三条一坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 2) 平尾政幸『平安京右京三条一坊三町（右京職）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3 2002年
- 3) 平田 泰「15 平安京右京三条一坊3」・吉村正親「16 平安京右京三条一坊4」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年

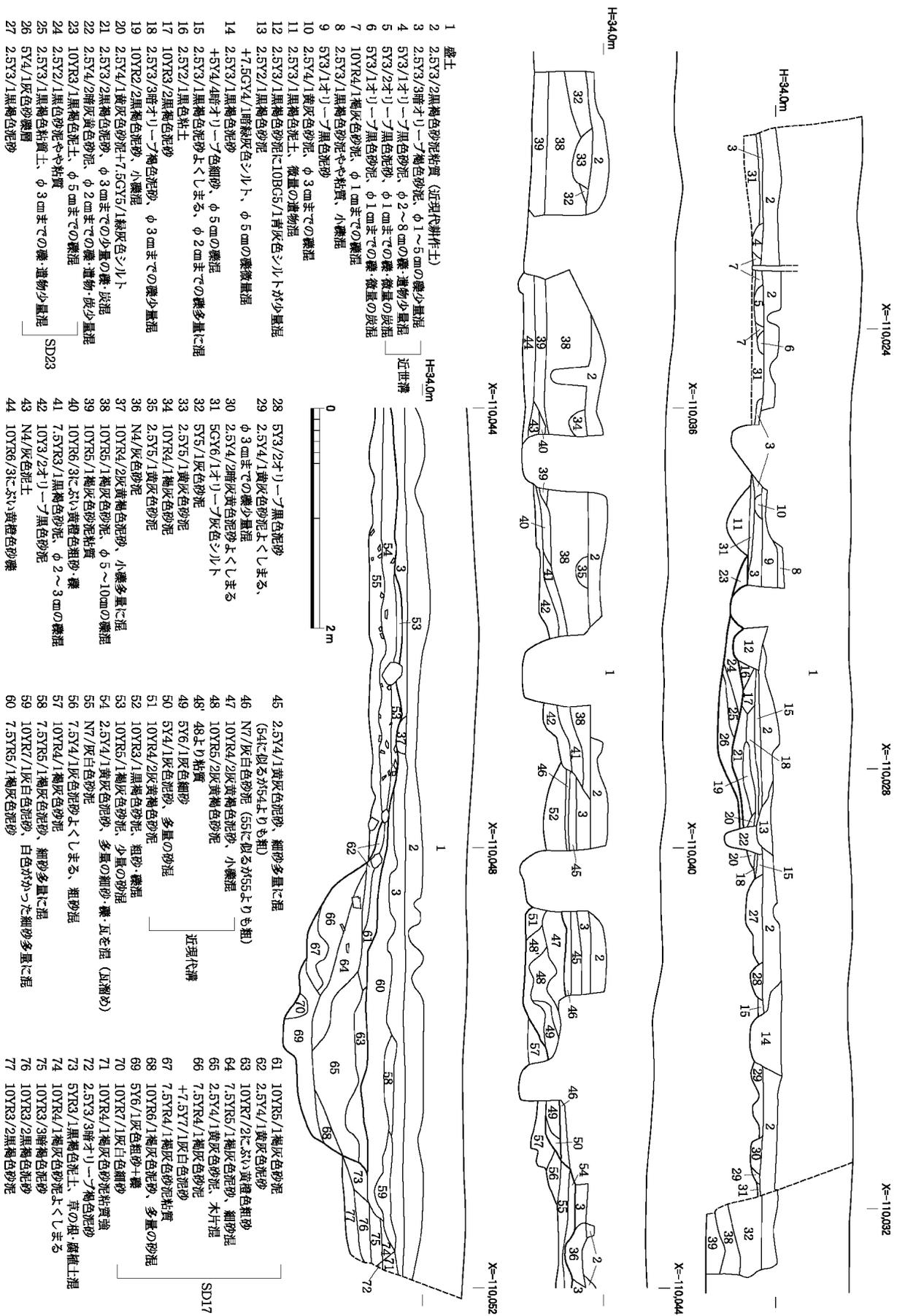
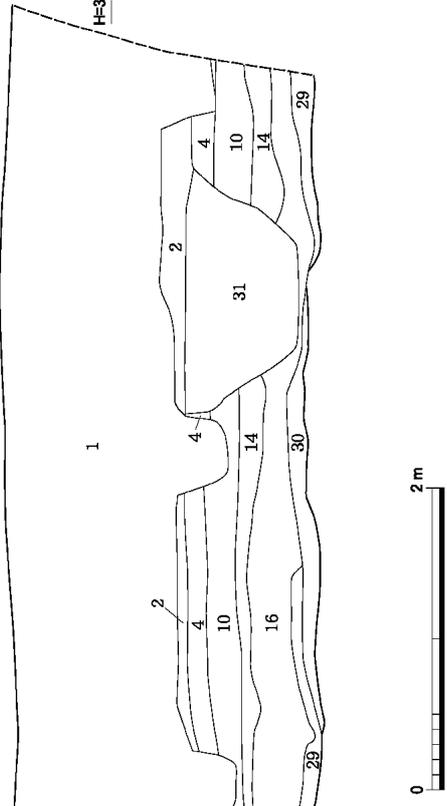
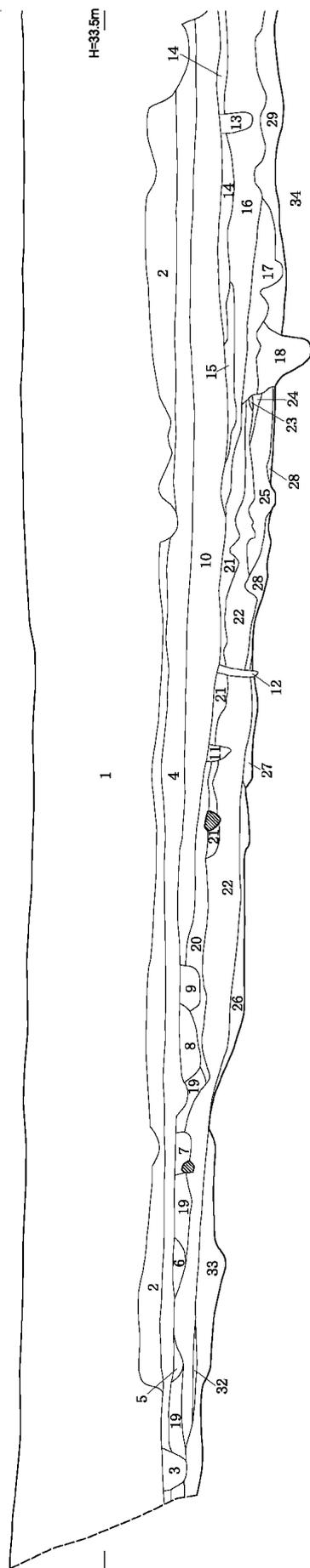


図11 16次調査七町地区東壁断面図(1:50)

X=110.092

X=110.084



- 1 現代礫土
- 2 5Y3/2オリーブ黒色泥砂、細粒 (近・現代耕土)
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (近・現代溝)
- 4 5Y4/2灰オリーブ色泥砂 (近世耕土)
- 5 5Y3/2オリーブ黒色泥砂 (近世小溝)
- 6 5Y3/2オリーブ黒色泥砂 (近世小溝)
- 7 5Y3/2オリーブ黒色泥砂、砂礫多量 (近世小溝)
- 8 5Y3/2オリーブ黒色泥砂 (近世小溝)
- 9 5Y3/2オリーブ黒色泥砂 (近世小溝)
- 10 10YR4/2灰黄褐色泥土 (SG24A)
- 11 5Y6/1灰色細砂 (新近分)
- 12 5Y6/1灰色細砂 (新近分)
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色泥土
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色泥土、小礫含む (SG24新)
- 15 2.5Y3/2黒褐色泥土 (SG24新)
- 16 2.5Y3/1黒褐色泥土 (SG24新) 題意出土
- 17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色腐植土 (SG24新)
- 18 10YR4/2灰黄褐色泥土 +10GY5/1緑灰色泥土 (SG24新 護岸P1)
- 19 7.5YR4/1緑灰色泥土、礫 (SG24新陸部)
- 20 5Y4/2灰オリーブ泥土、上面に砂礫を敷き詰める (SG24新州浜)
- 21 5Y4/2灰オリーブ泥土、上面に明灰色細砂を敷く (SG24新州浜)
- 22 10Y4/2オリーブ灰色泥土+10GY5/1緑灰色砂泥の練り込み状 (SG24新州浜整地)
- 23 5Y7/1灰白色細砂 (SG24新州浜整地)
- 24 2.5Y3/2黒褐色泥土 (SG24新州浜整地)
- 25 5Y3/2オリーブ黒褐色細粒 (SG24新州浜整地)
- 26 10YR4/2灰黄褐色泥土 (SG24旧)
- 27 2.5Y3/2黒褐色泥土 (SG24旧)
- 28 5Y3/1オリーブ黒色泥土、軟 (SG24旧)
- 29 2.5Y4/2暗灰黄色泥土 +10GY5/1緑灰色微砂、草木の根、基多量 (SG24旧)
- 30 5Y3/2オリーブ黒色砂礫、地山土層 (SG24旧)
- 31 5Y4/2~5/2灰オリーブ泥砂 (近・現代溝)
- 32 2.5Y3/1黒褐色泥土 (SG24旧)
- 33 7.5YR2/1黒色砂泥細砂、礫層、上面に礫を敷く (SG24旧州浜)
- 34 10GY5/1緑灰色微砂、均質良く締まる (地山)

図12 17次調査六町地区東壁断面図 (1 : 50)

Y=-23,528

Y=-23,524

Y=-23,520



图13 17次調査六町地区SG24旧実測図(1:100)

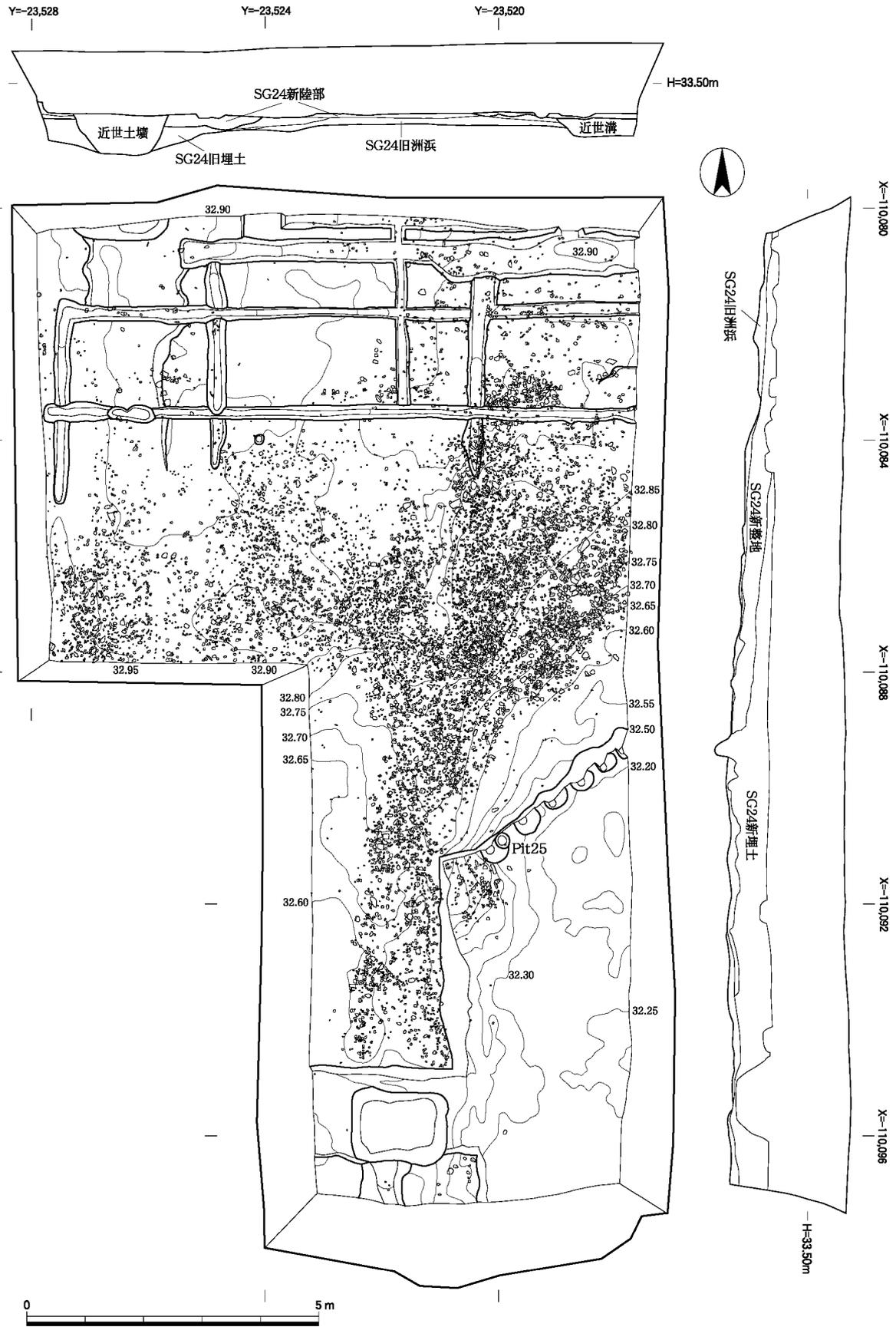


图14 17次調査六町地区SG24新実測図(1:100)

2. 遺 構

(1) 平安時代の遺構

建物SB01 掘立柱建物。東西の柱間は3.0mで東西列5間分と東端で北に3.6mの底分の柱穴を検出した。この建物は14次調査で西端を確認しており、それとあわせると東西6間の規模で南に庇の付く東西棟になる。時期は9世紀前期(平安京 期新～期古頃)と考える。

建物SB02 掘立柱建物。SB01と重複する位置に柱間2.4m等間で東西3間の柱列を検出した。東西棟の一部と考えられるが、規模は不明である。

柵列SA03 三条一坊六町の推定東築地心から約6m西に位置する南北柵列。柱間は1.8m。北でやや東に振れている。

柵列SA04 三条一坊六町の推定東築地心から約15m西に位置する南北柵列。柱間は1.8m。ほぼ方位に揃い、SB01の方位と合う。

湿地SX05 最下層に弥生土器を含む自然流路であるが平安時代にも一部が湿地状に残っていたとみられ、上層から平安時代の土器類が多数出土している。

溝SD07 西坊城小路東側溝。幅3m以上、深さ0.3m。約15mにわたって検出した。溝の東肩底部には護岸のための杭列が認められた。杭の間隔は0.3～0.5mで、径が3～5cmの比較的細かい

表2 遺構一覧表

遺構番号	遺跡名	次数	種類	時期	概要
01	六町	15次	SB	平安前期	掘立柱建物 2間以上×6間東西棟
02	六町	15次	SB	平安前期	掘立柱建物 東西3間分を検出
03	六町	15次	SA	平安前期	南北方向柵列
04	六町	15次	SA	平安後期	南北方向柵列
05	六町	15次	SX	平安前期～後期	湿地
06	三町	16次-1	SD	江戸時代	三町内南北溝
07	西坊城小路	16次-1	SD	平安前期～後期	西坊城小路東側溝
08新	三条坊門小路	16次-1	SD	平安後期～鎌倉	三条坊門小路南側溝
08旧	三条坊門小路	16次-1	SD	平安前期～後期	三条坊門小路南側溝
09	三町	16次-1	SD	平安前期	右京職北築地内溝
10	三条坊門小路	16次-1	SD	平安前期	三条坊門小路北側溝
11	三町	16次-1	SA	平安前期	右京職西面築地
12	三条坊門小路	16次-1	SF	平安前期	三条坊門小路
13	三条坊門小路	16次-1	SD	平安前期	三条坊門小路を横断する南北溝
14	七町	16次-2	SA	江戸時代	SD15に伴う柵列
15	七町	16次-2	SD	江戸時代	南北溝
16	七町	16次-2	SK	江戸時代	土壌
17	三条坊門小路	16次-2	SD	平安前期	三条坊門小路南側溝
18	三条坊門小路	16次-2	SD	平安前期	三条坊門小路北側溝
19	七町	16次-2	SD	平安前期	七町南内溝
20	七町	16次-2	SB	平安中期	掘立柱建物 1間×6間～南北棟
21	七町	16次-2	SA	平安前期	七町南面築地
22	七町	16次-2	SD	平安前期	流路
23	七町	16次-2	SD	平安前期	流路
24新	六町	17次	SG	平安前期	園池
24旧	六町	17次	SG	平安初頭	園池
25	六町	17次	Pit	平安後期	埋納遺構の可能性

丸杭を使用している。溝の埋土は粗砂と礫が主体である。

溝SD08新 三条坊門南側溝。南肩が攪乱を受けており明確ではないが幅3m以上、深さ0.4m。検出延長は約10mである。埋土は灰黄褐色の粗砂・礫が主体である。溝SD07とSD08は三町の西北隅で繋がる。

溝SD08旧 三条坊門南側溝。溝北肩がSD08新より約1m北に位置する。SD08新の前身の溝で、埋土からは平安時代前期の遺物が出土している。

溝SD09 右京職北面築地内溝。築地北西角から東に延びる溝で、規模は幅30～50cm、深さは約10cm。溝肩は板と杭で護岸されている。検出延長は7.6mでさらに東の調査区外に延びる。この溝は西面築地部分で暗渠になっていたと考えられる。

溝SD10 三条坊門小路北側溝の南肩部分部を検出した。形状は路面よりなだらかに落ち込み、幅30cmの段を有し溝底部に至る。規模は幅1.7m以上、深さ0.45m。埋土は黒褐色砂泥の均一な堆積である。

築地SA11 右京職西面築地。断面は低い台形状を呈し上端の幅は2.0mあり、西側の犬行部分は幅0.3～0.6mの段を形成する。東側の築地内側はなだらかに傾斜し、その上面からは多量の瓦が廃棄された状態で出た。北面築地については攪乱を受け明確ではないが、西面築地と同じく瓦が東西方向に散乱する。

路面SF12 三条坊門小路路面。南北幅6.7m。検出延長が4mである。路面の状況は、小石や瓦を密に敷き詰めた状態だが、径20～30cm大の河原石も散在する。路面は3層確認した。

溝SD13 三条坊門小路を横断する南北溝。三条坊門小路路面第2層下面で検出した。溝肩口のラインは不整で幅は0.4～0.8m、深さ0.1m前後で、にぶい黄橙色粗砂の埋土からは9世紀初頭の遺物が出土している。この溝は西坊城小路東側溝の推定線上に位置する。

溝SD18 三条坊門小路北側溝。瓦落ち下面で検出した。幅1.2～1.8m、深さ0.15～0.2mで両肩がかなり崩れた状況を呈する。溝底部の標高は東に低くなる。

溝SD17 三条坊門小路南側溝。調査区南端で厚さ約0.4mの褐灰色粗砂層下面で検出した。幅2.9m、深さ0.76mで検出延長は3.6mで溝底部の標高は東に低くなる。出土遺物は極めて少ない。

溝SD19 七町南面築地内溝。幅1.1m、深さ0.24mで埋土から平安時代初期の土器類が多量に出た。

建物SB20 南北6間以上、東西1間の南北棟。柱間は南北1.8m、東西3.6mである。建物の方位は北でやや東に振る。

築地SA21 三条一坊七町南面築地。基底部を検出した。築地部分は周囲からは0.1m前後の高まりがあり、その幅は約3mである。犬行部分は幅0.7～1.0mの段を有する。

流路SD22 北西から南東に延びる溝。幅0.5～0.6m、深さ約0.15m。

流路SD23 SD22と同じ方向に延びる溝。肩口のラインは不整で幅2.1～3.4m、深さ約0.3mを測る。

池SG24新 洲浜を有する池跡。洲浜は下層で検出されるSG24旧の渚から池部分を青灰色泥砂

で埋め立て、その上面に径3～10cm程の小石や瓦片を敷き詰めてなだらかな傾斜の洲浜を形成している。石敷きの洲浜は池部の手前2m程の所から明灰色の細砂敷きになり、汀には護岸のためと思われる柱穴が約60cm間隔で南西から北東方向に並ぶ。陸部も同様にSG24旧洲浜と埋土の上面を整地している。陸部の標高は33.0m。池底部の標高は32.3mである。出土した土器類から成立時期は9世紀後半と考えられる。

池SG24旧 SG24旧はSG24新の整地層を掘り下げた所で検出された。SG24新と同様に石敷きの洲浜を有する池跡で、地山の礫層に薄く黒褐色泥土を敷き、その上に径3cm程の小石を密につき固めている。洲浜はなだらかだが汀部分では傾斜は急で肩口で石敷きは途切れる。洲浜の西側は西北～東南方向の流路状の堆積で西北部分から取水していたことが考えられる。堆積状況からみて一時期の激しい流れによりSG24旧の洲浜の一部は流され、しばらく放置された後SG24新に改修されたようである。洲浜部分の標高は32.9m～32.7m。池底部の標高は32.2mである。9世紀初頭の遺物が出土している。

Pit25 平面形は円形。径約20cm、深さ約30cm。11世紀中頃の土師器杯・皿が4個体重なって出土した。土器の出土状況からみて埋納遺構の可能性もある。SG24新の渚付近上層に位置し、SG24新の埋土を切っていることから、この時期には池は廃絶したか、縮小していたと考えられる。

(2) 近世以降の遺構

溝SD06 三町地区で検出した近世の南北溝で北端で途切れる。幅1.8m、深さ0.3m。約9mにわたって検出した。調査区東端でも同様の溝と思われる西肩口を検出している。

柵列SA14 近世溝SD15の西側約1mで、これに平行する南北柵列。柱穴は径0.6mの円形。柱間は1.8m。南北に10基まで確認したが南側は攪乱され不明である。この柵はSD15に付随するものと考えられる。

溝SD15 七町地区で検出した近世南北溝。幅1.1m、深さ約0.6mであるが、調査区南端では幅2m、深さ約1.1mとなり急激に南に落ち込む。検出延長は20mである。埋土からは焼塩壺などが出土している。

土壌SK16 近世土壌。長さ2.1m、幅1.0mの長方形を呈し深さ0.2mである。

3. 遺物

(1) 瓦類

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、丸瓦、平瓦がある。出土数は、軒丸瓦は6点で、平安時代が5点、奈良時代が1点ある。軒平瓦は24点で、平安時代が6種・8点、奈良時代が12種・16点ある。鬼瓦は2点、鴟尾が1点である。他に平瓦に文字を押捺したものがある。

軒丸瓦（図版6、図15）

瓦1は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で外区外縁を欠く。蓮弁は短く反りが強い。胎土は小石を若干含み灰白色で、やや粗。平城宮6304型式。16次三町地区SA11瓦落ち出土。

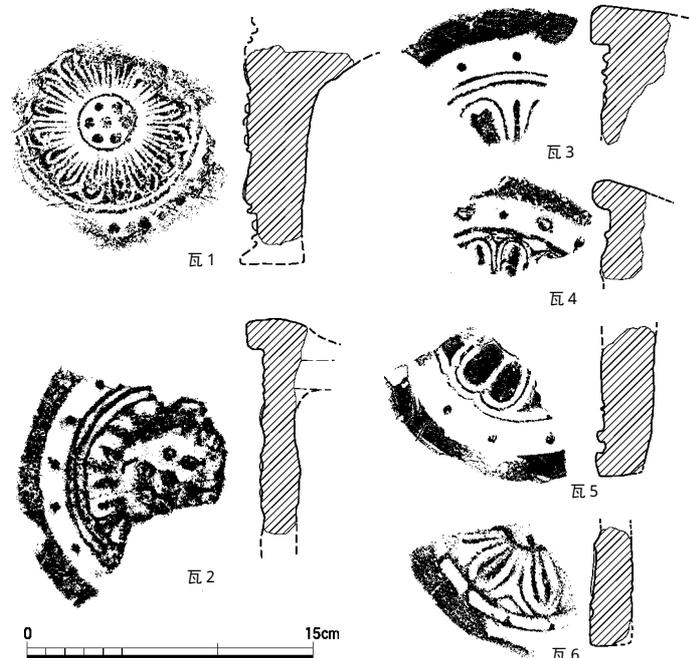


図15 軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

瓦2は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、中房に1+6の蓮子、内区弁間は撥形を呈するとみられ、外区と内区界線は二重である。胎土は砂質だが精良でやや軟質。二次焼成を受け赤褐色を呈する。摩滅が激しい。岸部瓦窯産。17次SG24新陸部出土。

瓦3は緑釉単弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、蓮弁の弁端が窪み、棒状の間弁と二重の界線をもつ。胎土は淡灰褐色で小石が多く、焼成は軟質。釉は暗緑色で厚く掛る。朝堂院跡などで出土例がある¹⁾。16次三町地区SD07出土。

瓦4は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、子葉は高く盛り上がり、間弁は縦長の三角形で、界線はやや太目。外区外縁ナデ、瓦当部側面縦ケズリ。胎土は灰白色で精良、硬質。17次SG24新出土。

瓦5は複弁四弁蓮華紋軒丸瓦で、瓦当裏面に布目が認められ、一本造り技法。胎土は灰白色で精良、やや軟質。16次三町地区SD08旧出土。

瓦6は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、中房は凹形で蓮弁、間弁は凸線で界線に接する。瓦当裏面に布目が残り、一本造り技法。胎土は緻密で焼成は軟質、淡橙色を呈する。京都市伏見区深草の嘉祥寺跡で出土例がある²⁾。16次七町地区SD15出土。

軒平瓦（図版6・7、図16）

瓦7は偏行唐草紋で外区に大粒の珠文が密に巡る。平瓦部凹面瓦当寄りにはケズリ、顎面は丁寧な調整を行う。胎土は緻密で細かい砂を多く含み、硬質。平城宮6643型式。16次三町地区SA11南東包含層出土。

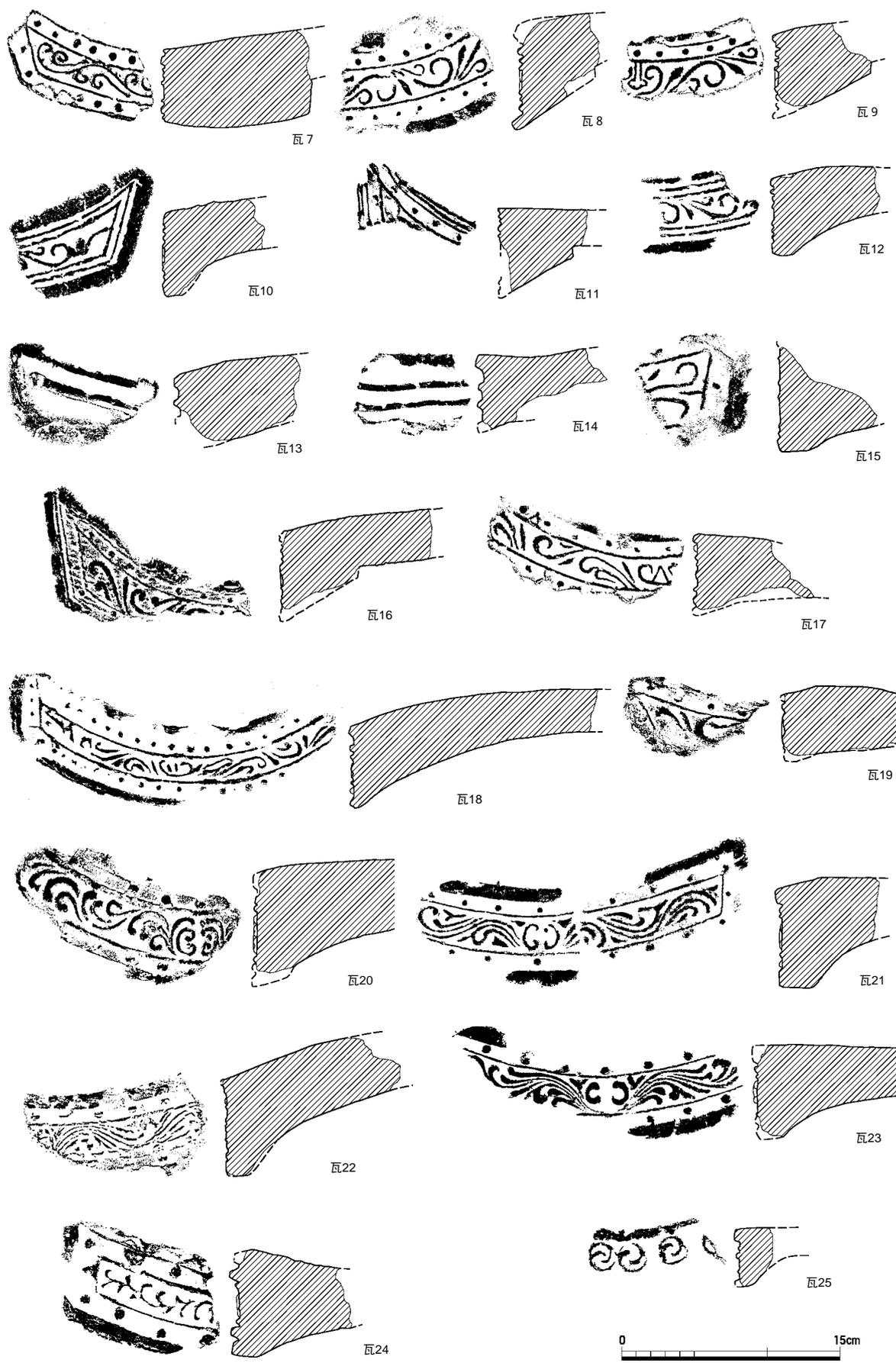


图16 軒平瓦拓影·実測図(1:4)

瓦8・9は中心飾りが上向きC字形で、中の花頭形基部が上外区界線に接する。胎土は灰褐色で小石が多い。平城宮6664D型式。瓦8は16次七町地区SD15出土。瓦9は16次三町地区SA11瓦落ち出土。

瓦10は軒平瓦の右端部破片で中央部はないが、中心飾りは上向きC字形で、中心に花頭形を配し、唐草紋は左右に3反転する平城宮6663C型式とみられる。胎土は精良で淡灰色、硬質。16次三町地区第1層出土。他に16次七町地区SA21南瓦落ちからも出土している。

瓦11は外区に小粒の珠紋を配する唐草紋軒平瓦で、上外区と脇区を突線で分ける。周縁に範痕が残る。平瓦部凹面は粗い横方向のヘラケズリ、顎部下面はナデ調整を行う。胎土は灰白色で精良、やや軟質。平城宮6665型式。17次六町地区SG24旧出土。

瓦12は二重の界線をもつ唐草紋軒平瓦の破片で、中央部は無いが、中心飾りは上向きC字形で中に花頭形を配する。胎土は精良で灰白色。平城宮6663C型式とみられる。16次三町地区SF12出土。他に16次七町地区SD15と遺物包含層からも出土している。

瓦13は下部は欠けるが重弧紋とみられる。郭線断面は台形を呈する。瓦当部凹面は横ケズリ、側面は縦ケズリ。胎土は灰白色で精良、焼成は軟質。奈良時代。16次三町地区SD13出土。

瓦14は重郭紋軒平瓦で、瓦当部凹面、凸面ともに縦ケズリ後に粗いナデを施す。胎土は砂を含まず精良で、内部が赤褐色、外面が淡緑灰色を呈し、硬質。難波宮6527型式。16次七町地区近世土壌出土。

瓦15は瓦当部右端の唐草、界線、珠紋がわずかに残る破片。調整不明。胎土は灰黄色で砂質、雲母を含む。16次七町地区攪乱墳出土。

瓦16は外区に小粒の珠紋を密に配する唐草文軒平瓦で、外縁に範痕が残る。瓦当面全体に範傷とみられる横位の条線が顕著にみられる。胎土は灰色を呈し砂質で硬質。平城宮6694A型式。16次七町地区近世土壌出土。

瓦17は中心飾りが上向きC字形で中に逆「V」字形を配する。外区珠文間に「×」文を配する。平瓦部凸面は前半部を横方向のヘラケズリ、凹面は横方向のヘラケズリ、後部には布目が残る。胎土は淡黄白色で精良、軟質。平城宮6710A型式。16次三町地区SA11瓦落ち出土。他に16次三町地区攪乱墳からも出土。

瓦18は不均整な唐草紋で、下外区の珠文間に小突起がみられる。中心飾りは上向きC字形で平瓦部凹面、凸面ともに横方向のヘラケズリ。胎土は灰白色で砂粒をわずかに含み、軟質。平城宮6711Aa型式。16次三町地区SA11瓦落ち出土。

瓦19は瓦当部左端の破片。唐草紋は太く、一部は上外区との界線に接する。珠文はやや大粒である。瓦当部凹面横ケズリ。胎土は淡黄灰色で小砂を含み、焼成は軟質。平城宮6710C型式。16次七町地区近世小溝出土。

瓦20は中心飾りがC字対向形で、太い唐草文が左右に3反転する。平瓦部凸面は顎の屈曲部までタキあるいはナデ状の平行条線が認められる。胎土は淡黄白色で小さな砂粒が多く、焼成は軟質で表面は灰黒色。西賀茂角社西群瓦窯産³⁾。16次三町地区SF12出土。

瓦21は中心飾りが対向C字形で、唐草紋は左右に3反転する。瓦当部凹面、凸面ともに横ナデ、側面縦ケズリ。胎土は灰白色で表面は灰黒色。細かい砂を含み、軟質。幡枝瓦窯産軒平瓦と同紋である。16次七町地区築地SA21南瓦落ち出土。近世小溝からも同範品が出土している。

瓦22は中心飾りはC字対向形で、瓦21と唐草の文様構成は同じ。范ズレが著しく、珠文が全て二重に現れている。瓦当部凹面は瓦当部から7cmまで横ケズリ、平瓦部凸面縦ナデ。胎土は灰白色で細かい砂粒を含み、軟質。幡枝瓦窯跡⁴⁾。16次七町地区北西部遺物包含層で出土。

瓦23は中心飾りがC字対向形で、唐草紋は左右に3反転する。瓦当部外周及び顎部凸面は横方向のヘラケズリ、顎部から平瓦部凸面にかけては縦方向のヘラケズリをする。上外区の珠紋部分に范傷が認められ、池田瓦窯産⁵⁾。胎土は灰白色で、砂粒はほとんど含まず、焼成は軟質である。16次三町地区SF12出土。SF12から同範瓦がもう1点出土しており、顎部裏にベンガラが付着する。

瓦24は大粒で高い珠紋を配する均整唐草紋軒平瓦である。瓦当部凹面には先端まで粗い布目が残る。瓦当部凸面、側面には縦方向の粗いヘラケズリを行う。脇区の珠紋部分に范傷が認められ、大極殿跡出土のものと同範である⁶⁾。胎土は淡灰色で緻密、堅緻。森ヶ東窯産と推定できる。16次三町地区SD08北肩口出土。

瓦25は右巻き2巴紋を連続して配する。瓦当部凹面に布目、瓦当部裏面はオサエ。瓦当部は半折り曲げ成形。胎土は灰黄色で小石を多く含み、軟質。山城産。16次三町地区SD08新出土。

鴟尾・鬼瓦(図版8、図17)

瓦26は鬼瓦右足部の破片で、外区の珠紋帯と頬が残る。成形は范型による。側面・割形内は縦

ケズリ、裏面は粗いケズリの後オサエ。胎土は灰白色で小石をわずかに含み、軟質。16次七町地区築地SA21南瓦落ち出土。

瓦27は鬼瓦右側の破片で珠紋帯と目の部分が残る。成形は范型で、側面は縦ケズリ、裏面は粗いケズリの後ナデ。胎土は灰白色で精良、焼成は堅緻。16次七町地区SK16出土。

瓦28は鴟尾鱗部の左側面の破片。成形は粘土紐積み上げによる。裏面に同心円文叩きがみられる。胎土は淡灰色で精良、堅緻。16次七町地区築地SA21南瓦落ち出土。

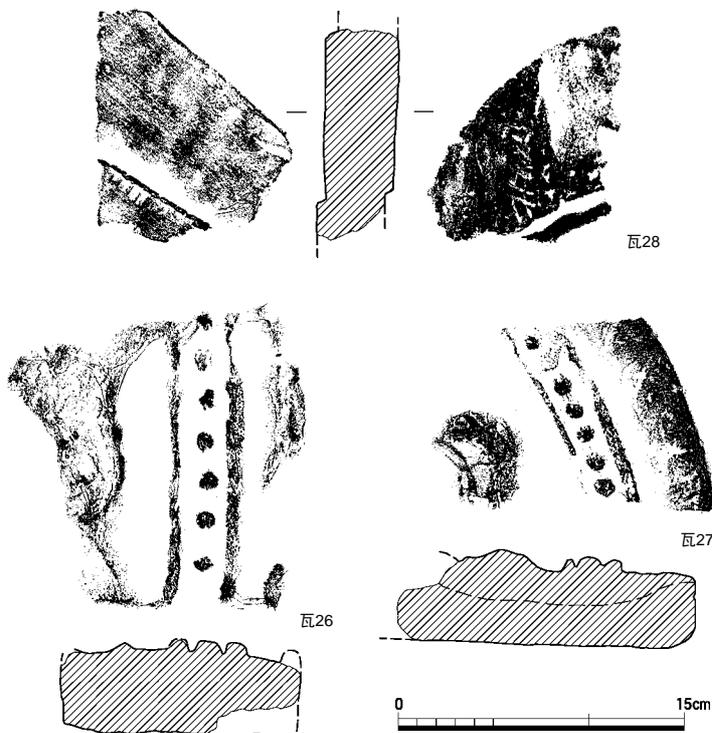


図17 鬼瓦・鴟尾拓影・実測図(1:4)

文字瓦（図版 8、図18、表 3）

平瓦凹面に文字を押捺したものは全体で36点出土した。15次と17次で各 1 点、16次で34点、文字の判読できないものを含め12種ある。出土地点の大半が築地内・外側、側溝、路面である。

瓦29から瓦42までは池田瓦窯跡（以下瓦窯⁷⁾）で出土している瓦と同印である。

瓦29～31は『右坊』を押捺しており、それぞれ字体が異なる。瓦29と同印のものが最も出土数が多く15点ある。瓦32～35は1字のみの破片であるが、瓦窯出土のものとは比べその字体の特徴から瓦32・33、瓦34・35が一对となりそれぞれ『右坊』となる。瓦34・35は合わせて5点出土している。瓦36と瓦37も同様に特徴のある『右』『坊』の字体から『右坊小』と繋がる印である。瓦38は『坊』の裏字で1字のみの破片であるが、裏字であること、縦約5.0cm、幅4.6cmと大きいことから瓦窯出土の『右坊小』と同印とみられる。瓦39は裏字の『右坊常』である。瓦40は『坊城』2字の破片だが、上に『右』が付く。瓦41は『右坊』の2字の下に判読不明の漢字『食』が付くと考えられる。瓦42も瓦窯跡の報告書で「文字の可能性が高いが判読できない。」としている。

15次出土の瓦43は陽銘で『理』とみられる印を押捺する。胎土は灰白色。平城宮跡出土のものと同印である。

（2）土器類

出土遺物の種類は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、木製品、金属製品等である。時代は弥生時代から江戸時代末期までのものがあるが、そのほとんどが平安時代のものである。以下に主要な遺物について述べる。

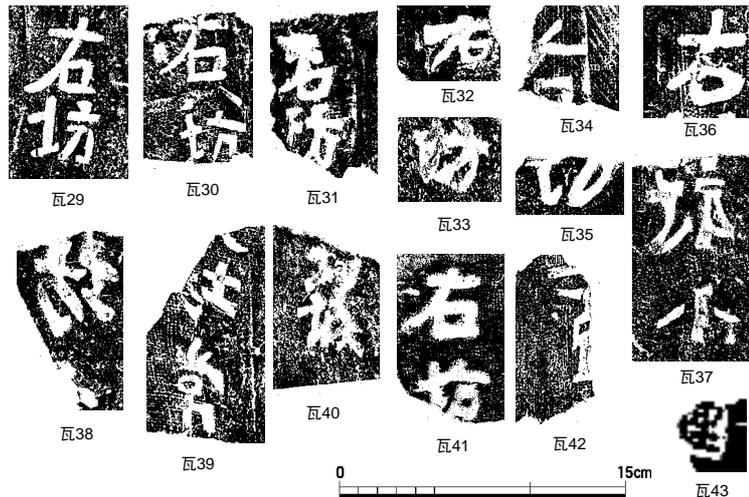


図18 文字瓦拓影（1：4）

表 3 文字瓦一覧表

番号	印名	出土遺構	点数	池田瓦窯図版番号
瓦29	『右坊』	SD06・SD07・SD08新・SA11・SD18・近世小溝	15	34-5と同印
瓦30	『右坊』	SD08旧	1	36-6と同印
瓦31	『右坊』	SD08旧・SA11	2	34-1と同印
瓦32・33	『右坊』	SD06・SA11	2	34-7と同印
瓦34・35	『右坊』	SD08・SF12・SD06	5	34-11と同印
瓦36・37	『右坊小』	SD08旧・SA11瓦落ち	3	35-16と同印
瓦38	『(右)坊(小)』	SA11瓦落ち	1	35-17と同印
瓦39	『右坊常』	SF12・SD07	2	35-18と同印
瓦40	『(右)坊城』	SA11	1	35-19と同印
瓦41	『右坊食』	SG24新	1	35-15と同印
瓦42	『食』	SD08旧	1	35-21と同印
瓦43	『理』	SX05	1	

SD19出土土器（図版9～12、図19～22、表4・5、付表1）

土器類は総破片数5,993片あり、その内容は土師器88.7%、黒色土器1.1%、須恵器8.1%、その他2.1%である。機能別に見ると供膳具70.9%、貯蔵具4.0%、煮沸具22.0%と椀皿などの供膳具が多く、このうち土師器が94.6%と大半を占めている。土師器以外の食器類について比率を示せば、黒色土器5.2%、須恵器94.8%と須恵器の比率が非常に高い。量的にもまとまりのある平安京期中の一括資料である。

土師器 椀A⁸⁾（1～6）口径14.1cm、高さ3.8cm、外面の調整はヘラケズリによるが、5は底部のみヘラケズリで体部にはオサエを残す。

杯A（7～18）口径18.0cm、高さ3.8cm、外面の調整は全てヘラケズリによる。口縁端部は小さくつまみあげている。

表4 SD19出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	4018	75.6%	88.7%
	高杯・盤・鉢	26	0.5%	
	甕・釜・鍋	1272	23.9%	
	その他	2	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	5318	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	12	18.2%	1.1%
	甕	54	81.8%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	66	100.0%	
須恵器	杯・椀・皿	217	44.8%	8.1%
	壺・瓶	126	26.0%	
	鉢	28	5.8%	
	甕・大型壺	113	23.3%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	484	100.0%	
緑釉陶器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
白色土器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	高杯	0	-	
	盤	0	-	
	その他	0	-	
	小計	0	-	
灰釉陶器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
輸入陶器	杯・椀・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
他	その他・不明	125	100.0%	2.1%
総数		5993	100.0%	100.0%

皿A（28～30）口径19.8cm、高さ2.5cm、外面の調整は全てヘラケズリ。28は他のものと違い胎土はやや砂質で赤みを帯び、口縁部の立ち上がりの形態、口縁端部のつまみあげの様子も異なる。河内産のものと考えられる。

皿A（20～27）口径16.4cm、高さ2.1cm、外面の調整は23以外はすべてヘラケズリである。

杯B（19）口径18.8cm、高さ5.0cm、外面はヘラケズリの後ミガキを施す。

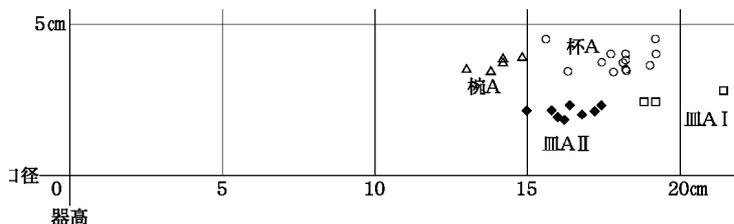
杯蓋（31）口径23.4cm、高さ2.5cm（つまみ以下）、天井部は4方向のミガキ、口縁部に6方向のミガキを施す。つまみは上部が欠損している。

甕（32～40）口径14cm程のもの（33・34）、口径17cm程のもの（35・36）、30cm程のもの（37～40）に分類することができる。32は向かい合う2方向に把手が付く。胎土は粗く、調整は内面に指痕を残し粗雑である。口縁端部は上方につまみ上げる。33は体部はタタキ、口縁部はナデ、端部は外方にひらく。34は丸い胴部を持ち、ハケメ調整。中型の35は外面はタタキ後ハケメ、内面はナデで仕上げる。36は外面縦方向のハケメ、内面底部から上方にカキトリ、口縁部内面は横方向のハケメ調整。大型のものはい

ずれも外面ハケメ調整。口縁端部は折り返す。

他に土師器椀皿類では墨書の残る小片が21点あるが、解読できるのは「加・・・」の1点である。

表5 SD19土師器法量分布



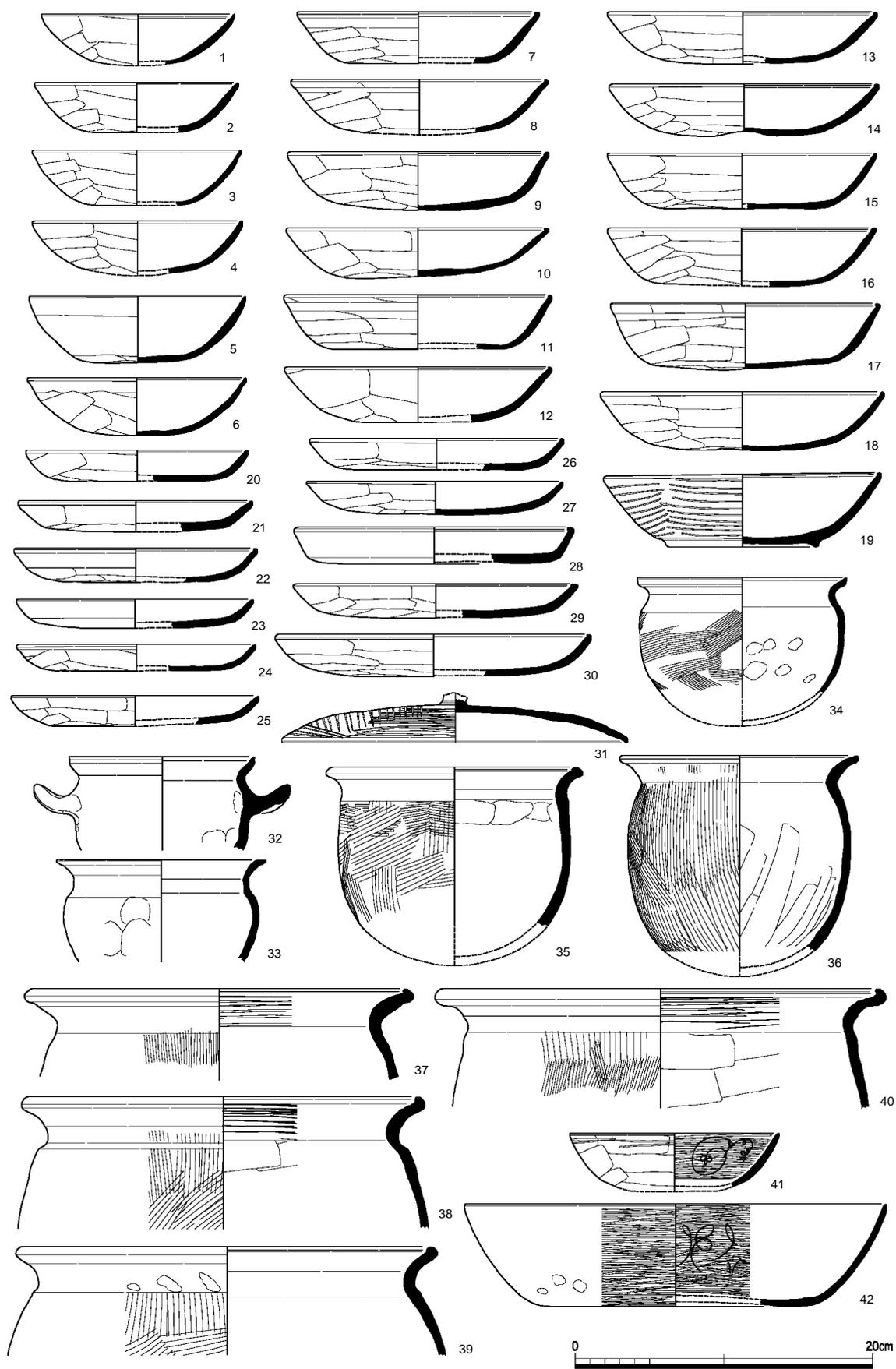


图19 SD19出土土師器・黑色土器实测图(1:4)

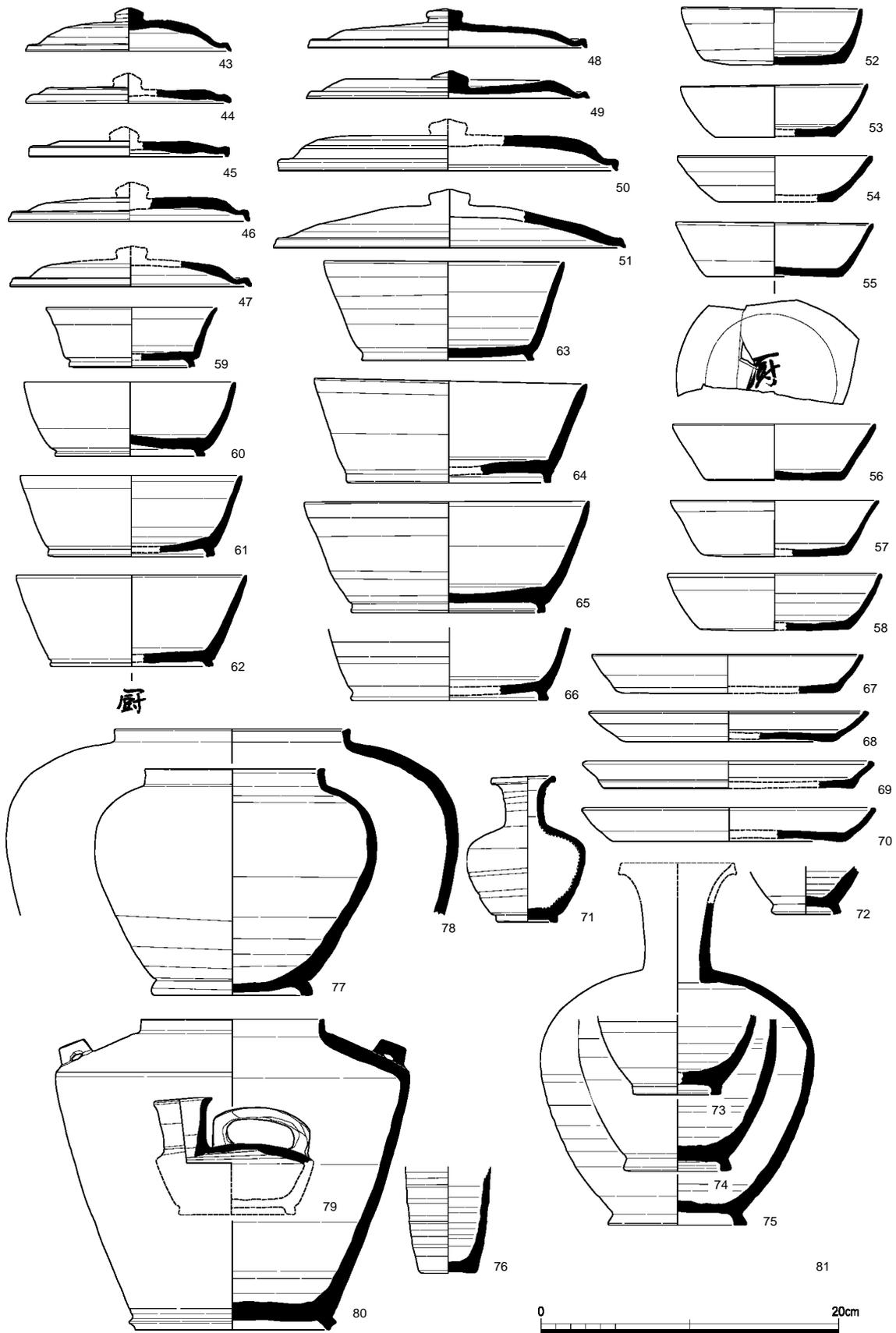


图20 SD19出土須惠器实测图(1:4)

黒色土器 杯A (41・42) 42は非常に大型のもので内外面とも密なミガキを施し内面には暗文をめぐらす。B類である。41は外面はヘラケズリの後粗いミガキ、内面は密なミガキ後花形の暗文を施す。A類である。

須恵器 杯蓋 (43~51) 口径により13cm台、16~18cm台、23cm台のものに分けられる。いずれもつまみを持ち、硯として転用されたものが多い。

杯A (52~58) 口径13.3cm、高さ3.7cm、外面底部の調整はいずれもヘラオコシ後かるくナデ、焼成の甘いものが多い。55は外面底部に「厨」の墨書がある。

杯B (59~66) 蓋と同じように口径により11cm台、14~16cm台、18cm台の3種類に分けられる。62には外面底部に「厨」の墨書がある。

皿A (67~70) 口径19.2cm、高さ2.2cm。

壺 (71~80) 71は壺Mと分類されるものである。丸い体部に細くやや長い口頸部がつき、口縁は外反し端部は小さく玉縁状を呈する。72~75は壺Lと分類されるものである。高台はいずれも貼り付け。76は壺Gの底部。77・78は壺Aで丸い体部に直立する短い口頸部を持つ。底部には貼り付け高台がつく。80も短頸壺だが、肩部には稜がありその上部に四角の粘土板に楕円形の穴を穿った耳を持つ。底部には貼り付け高台が付く。平瓶79は天井部以上のみが残存する。

鉢 (81) 肩の張る体部に外反する短い口縁部がつき、底部には高台がつく。

このほか製塩土器 (図21) が多数出土している。混入土器として弥生土器壺 (図22 - 84) が1点出土している。

SG24旧出土土器 (図版12、図23、表6・7、付表2)

SG24旧の土器類は総破片数772片あり、その内容は土師器84.5%、黒色土器0.4%、須恵器9.2%、その他6.0%である。機能別に見ると供膳具75.0%、貯蔵具4.4%、煮沸具11.3%と椀皿などの供膳具が多く、このうち土師器が93.8%と大半を占めている。土師器以外の食器類について比率を示せば、黒色



図21 SD19出土製塩土器

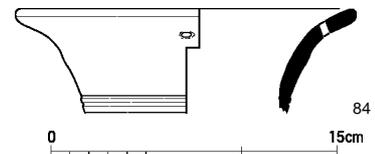


図22 SD19出土弥生土器
実測図 (1 : 4)

表6 SG24旧出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	杯・碗・皿	543	83.3%	84.4%
	高杯・盤・鉢	19	2.9%	
	甕・釜・鍋	86	13.2%	
	その他	0	0.0%	
	不明	4	0.6%	
	小計	652	100.0%	
黒色土器	杯・碗・皿	2	66.7%	0.4%
	甕	1	33.3%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	3	100.0%	
須恵器	杯・碗・皿	34	47.9%	9.2%
	壺・瓶	14	19.7%	
	鉢	3	4.2%	
	甕・大型壺	20	28.2%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	71	100.0%	
緑釉陶器	杯・碗・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
白色土器	杯・碗・皿	0	-	0.0%
	高杯	0	-	
	盤	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
灰釉陶器	杯・碗・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	-	0.0%
	壺・瓶	0	-	
	その他	0	-	
	不明	0	-	
	小計	0	-	
他	その他・不明	46	100.0%	6.0%
総数		772	100.0%	100.0%

土器5.6%、須恵器94.4%と須恵器の比率が非常に高い。SG24旧の遺物の年代は9世紀初頭（平安京期中）に属する。

土師器 椀 A（86） 口径13.4cm、高さ3.5cm、外面の調整はヘラケズリによる。

杯 A（87・88） 口径18.5cm、高さ（3.5）cm、外面の調整はヘラケズリによる。

皿 A（89） 口径20.6cm、高さ2.1cm、外面の調整はヘラケズリ。

甕（90） 口径15.6cm。外面の調整は幅1.5mmほどのハケメ、内面上部はオサエのちナデ調整、下部は粗くカキトリ。口縁部内面は横方向のハケメ、口縁端部は上方につまみ上げる。

表7 SG24旧土師器法量分布

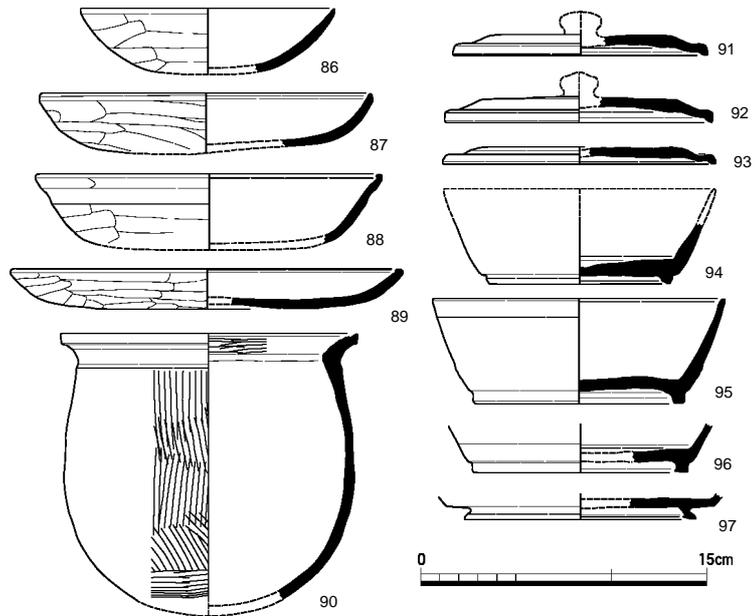
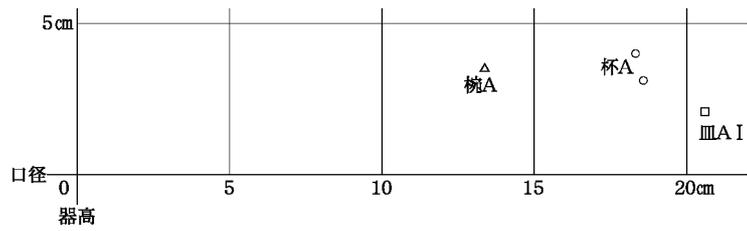


図23 SG24旧出土土器実測図（1：4）

須恵器 杯蓋（91～93） つまみの付くものと、そうでないものがある。

杯 B（94～97） 96以外は転用碗として利用されている。97は高台の取り付け位置が畿内系のもとの異なり、内側に入り込み、高台の形態も異なる。東海系のものと思われる。

SX05出土土器（図24、付表3）

SX05とその上層から出土した土器類の総破片数は2,288片で、種類別の比率は土師器66.3%、黒色土器5.9%、須恵器19.5%、緑釉陶器3.9%、白色土器1.0%、灰釉陶器0.9%、その他2.4%である。このほか数字にあらわれない白磁が1片ある。機能別の比率では、供膳具68.0%、貯蔵具16.7%、煮沸具10.5%となり、食器類が多い。土師器を除く食器類での比率は黒色土器35.3%、須恵器19.9%、緑釉陶器32.0%、白色土器8.5%、灰釉陶器4.0%、輸入陶磁器（白磁）0.4%となり、黒色土器がやや高い比率を示すほか、白色土器が平安京の平均的な比率に対してかなり高い数値となっている。

SX05下層から出土した土器類は平安京 期新～ 期古の9世紀前半に属するものである。最上層及び上部の整地土層の土器類は平安京 期に位置づけられる。

出土した土師器は小片ばかりで図示できるものは少ない。

土師器 杯 B（98） 底部のみ残存。高台は貼り付け。

杯蓋（99） つまみ部分である。貼り付け部分で剥離している。

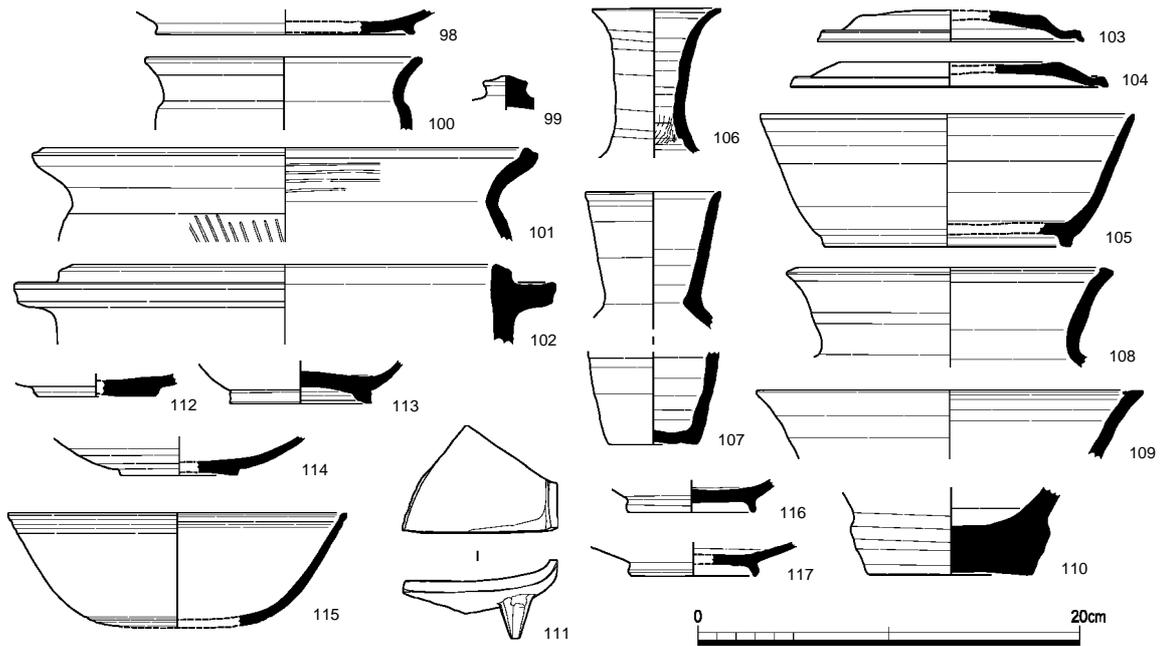


図24 SX05出土土器実測図(1:4)

甕(100・101) いずれも口縁部で、胎土は砂質である。

羽釜(102) 口縁部で、胎土は砂質である。磨滅激しく調製は不明。

須恵器 杯蓋(103・104) どちらも硯として転用されている。つまみの痕跡はない。

杯B(105) 胎土は細粒、緻密で焼成も良好である。

壺(106・107) 106は長頸壺の口頸部である。付け根部分に接合痕が認められ、絞り目が残る。口縁部は緩やかに外反し端部は丸くおさめる。107は壺Gで、直接接合しないが、復元して図示した。

甕(108・109) いずれも口縁部である。109の端部は水平面をもち内側に小さく突出する。

擂鉢(110) 分厚い底部。底面には糸切り痕を残す。

風字硯(111) 脚部と本体端部はヘラケズリ調整。猿投産である。

緑釉陶器 山城系(112・114)、尾張系(115)、近江系(113)のものがある。

椀(112・113・115) 山城系の112は円盤高台(A)で軟質、全面施釉。尾張系の115は無高台(C)の杯で外面の口縁部と底部付近に2本ずつ沈線をめぐらす。全面に丁寧なミガキをしたのち全面に厚く施釉する。近江系の113は貼り付けの輪高台(Bc1)。高台内に糸切り痕を残す。素地は須恵質。全面施釉、内面にトチン痕がある。

皿(114) 山城系の114は円盤高台(A)で素地は硬質、全面施釉。

灰釉陶器 椀(116) 端部に丸味のあるやや細長い輪高台である(Bb4)。内面体部のみ薄く刷毛塗り施釉。

皿(117) 端部に丸味のあるやや細長い輪高台である(Bb4)。内外面底部以外を薄く刷毛塗り施釉する。

このほかにSX05下層の自然流路から少量の弥生土器が出土した。

SG24新出土土器（図版12・13、図25、表8・9、附表4）

出土した土器類は総破片数2,297片あり、その内容は土師器88.2%、黒色土器0.8%、須恵器7.4%、緑釉陶器1.5%、白色土器0.1%、灰釉陶器1.1%、輸入陶磁器0.2%、その他0.7%である。機能別に見ると供膳具86.5%、貯蔵具4.1%、煮沸具2.8%と椀皿などの供膳具が多く、このうち土師器が94.7%と大半を占めている。土師器以外の食器類について比率を示せば、黒色土器12.3%、須恵器29.2%、緑釉陶器31.1%、白色土器1.9%、灰釉陶器20.8%、輸入陶磁器4.7%で施釉陶磁器の比率が高い。SG24新の遺物の年代は9世紀後半（平安京 期中）に属する。量はあまり多くないが、型的的にまとまりのある資料で、残存状態も良好である。

土師器 椀 A（118～128） 口径14.0cm、高さ2.8cm。外面体部はオサエ、口縁部及び内面の調整はナデ。内面底部に木口でナデたようなハケメ調整のものがある。128には外面底部に「阿古継」の墨書がある。

表8 SG24新出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	杯・椀・皿	1882	92.9%	88.2%
	高杯・盤・鉢	46	2.3%	
	甕・釜・鍋	59	2.9%	
	その他	20	1.0%	
	不明	19	0.9%	
	小計	2026	100.0%	
黒色土器	杯・椀・皿	13	68.4%	0.8%
	甕	6	31.6%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	19	100.0%	
須恵器	杯・椀・皿	31	18.3%	7.4%
	壺・瓶	28	16.6%	
	鉢	44	26.0%	
	甕・大型壺	63	37.3%	
	その他	3	1.8%	
	不明	0	0.0%	
	小計	169	100.0%	
緑釉陶器	杯・椀・皿	33	97.1%	1.5%
	壺・瓶	0	0.0%	
	その他	1	2.9%	
	不明	0	0.0%	
	小計	34	100.0%	
白色土器	杯・椀・皿	2	100.0%	0.1%
	高杯	0	0.0%	
	盤	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	2	100.0%	
灰釉陶器	杯・椀・皿	22	84.6%	1.1%
	壺・瓶	4	15.4%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	26	100.0%	
輸入陶磁器	杯・椀・皿	5	100.0%	0.2%
	壺・瓶	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	
	不明	0	0.0%	
	小計	5	100.0%	
他	その他・不明	16	100.0%	0.7%
総数		2297	100.0%	100.0%

調整はナデ。内面底部に木口でナデたようなハケメ調整のものがある。128には外面底部に「阿古継」の墨書がある。

杯 A（129～134） 口径15.7cm、高さ3.0cm。調整は椀 A とほとんど同じだが、129は外面調整がヘラケズリである。

皿 A（135～141） 口径14.6cm、高さ1.9cm。調整、手法は椀、杯とほとんど同じだが口縁部の屈曲がやや強い。135には外面底部に墨書があるが判読不能。

杯 B（142） 外面の調整はヘラケズリによる。内面底部には木口でナデたようなハケメ調整を行い、高台は貼り付けている。

白色土器 椀（143・144） 143の外面調整はナデの後粗い回転ミガキ、内面は磨滅して調整不明。高台は削りだしである。144は削りだしの高台部分。

須恵器 鉢（145） 屈曲した口縁部で端部は肥厚し玉縁状を呈する。

椀（146・147） いずれも糸切り未調整の底部の破片である。

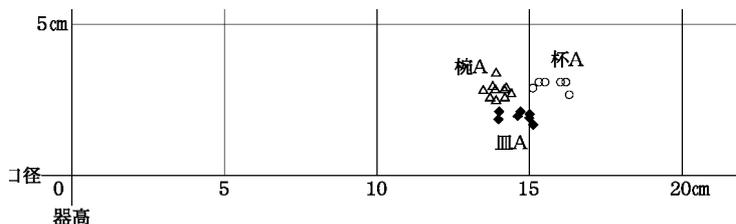
蓋（148） 天井部ヘラオコシ、口縁部は屈曲せずになだらかに外反し、端部はやや膨らみをもって丸くおさめる。硯として使用されており、内面は磨耗しなめらかで、内外面共墨

が付着する。

壺（149） 体部と底部の破片で、底部は糸切り未調整。

緑釉陶器 壺（150） 把手付き壺で、把手の下端が残る。外面には密なミガキを行い、厚く施釉

表9 SG24新土師器法量分布



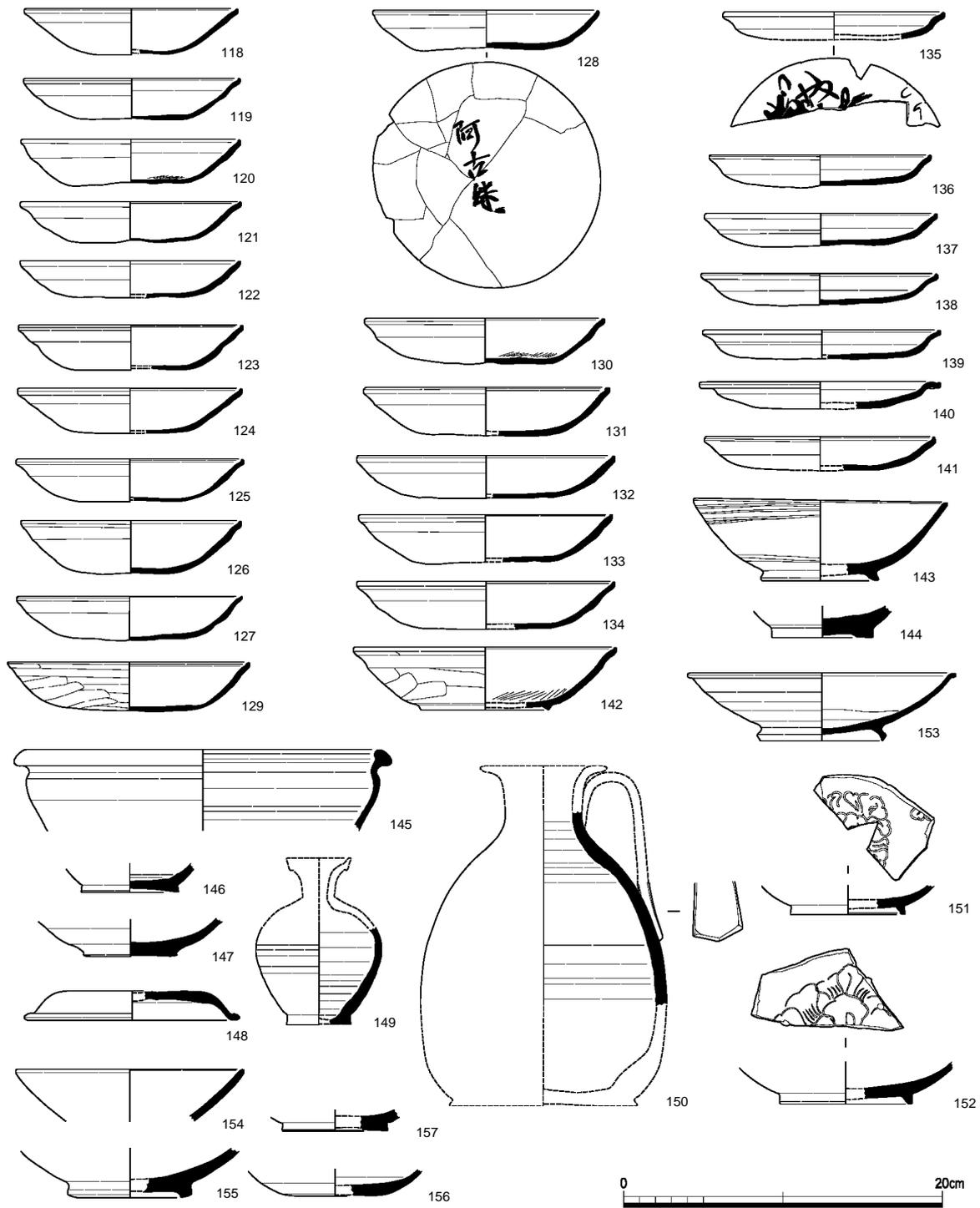


図25 SG24新出土土器実測図(1:4)

する。内面にも薄く釉が付着する。

椀(151・152) どちらも尾張系のもので、密なミガキに全面施釉。内面に陰刻花文が施されている。底部は151は断面隅丸方形の輪高台(Bb1)、152は高台端部にやや丸味を持つ(Bb2)、どちらも高台内にトチン痕を残す。

灰釉陶器 椀(153) 口径16.8cm、高さ4.3cm、高台径7.8cm。なだらかに広がる体部に外へ張り出す輪高台が付く(Bd4)、口縁部は小さく外反し丸くおさめる。内面体部のみ薄く刷毛塗り

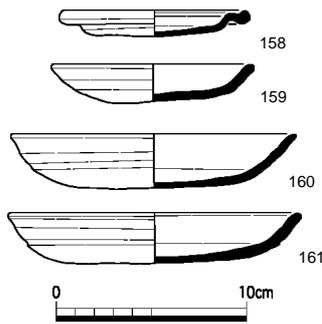


図26 Pit25出土土師器
実測図(1:4)

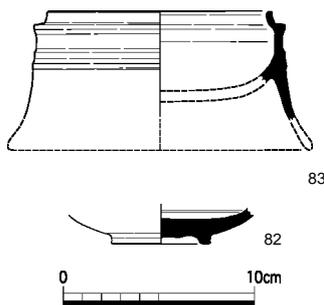


図27 SA11出土青磁
実測図(1:4)

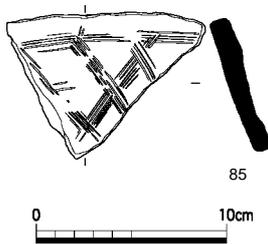


図28 SD09出土弥生土器
実測図(1:4)

施釉する。

輸入陶磁器 青磁椀(154~156)と白磁椀(157)がある。154は直線的に広がる口縁部の破片。155はケズり出しの輪高台が付く。高台端面は露胎し貝メが認められる。156は無高台の椀。底部外周の釉をかきとっている。3点とも越州窯青磁。157は邢窯産とされる白磁の蛇の目高台部分である。高台底面の釉をかきとり露胎とする。釉は無色透明で素地の白さが際立つ。

Pit25出土土器(図版13、図26、付表5)

ほぼ完形の土師器杯・皿が4点まとまって出土した。

土師器 皿A(158) 口径10.1cm、高さ1.3cm。調整は内面底部と口縁部内外面をナデ、外面体底部はオサエ。口縁部は屈曲し端部には土を厚く残す。

皿N(159~161) 口径10.8cm、高さ2.0cmのもの(159)と口径15.2cm、高さ2.8cm(160・161)のものがある。調整は内面底部と口縁部内外面をナデ、外面体底部はオサエ。口縁部は2段ナデ、わずかに外反し端部は丸くおさめる。

SA11出土土器(図27、付表6)

SA11の瓦落ち部分からわずかに土器類が出土した。小片のものばかりで、図示できるものは越州窯青磁(82・83)の2点である。

越州窯青磁 椀(82) 輪高台の椀底部である。外面底部ケズリ、高台底部以外を全面施釉。内外面にメアトがつく。内面

口縁部の立ち上がり部分に稜を持つ。

香炉(83) 直立する口縁部と段をなす蓋受け部分は釉をかきとり、狭い間隔でメアトを残す。口縁直下に1条、胴部に2条の凸帯をめぐらす。脚部は裾に向かって広がる。透かし穴は確認できない。

SD09出土土器(図28、付表7)

このほかに図示できるものには、SD09から混入土器として出土した弥生土器(85)がある。

(3) 土製品

SG24新出土土製品(図29、表10)

土製品ではSG24新から土錘が5点出土している。162~165はずんぐりした紡錘形で中央に貫通孔をもつ。孔はほぼ正円で径は一定である。胎土は緻密で、色調はいずれも灰白色である。166は両端がすばまる紡錘形で断面X字状を呈する。長軸に沿って相対する2方向を棒状のもので

表10 SG24新出土土錘一覧表

No.	実測図 (1:4)	色調	備考
162		N8/0 灰白色	長さ5.2cm 径3.5cm 孔径1.0~1.1cm 胎土密・細粒
163		7.5Y8/1 灰白色	長さ5.2cm 径3.6cm 孔径1.0~1.1cm 胎土細粒
164		N8/0 灰白色	長さ4.2cm 径3.2cm 孔径1.1cm 胎土細粒
165		N8/0 灰白色	長さ5.5cm 径3.2cm 孔径1.0cm 胎土細粒
166		10YR6/2 灰黄褐色	大きさ6.0×2.9cm 胎土やや粗 白色細粒雲母細粒含む



図29 SG24新出土土錘

デつけて溝とし、残る2方は折り曲げた様なしわが残る。胎土はやや粗く、白色細粒、雲母微細粒を含む。

このほかSD19から土馬が2点出土しているが、小片である。

(4) 木製品

SD19出土木製品(図版14、図30)

下駄(木-1) 台の平面形は小判形で鼻緒を通す孔を三箇所にあける。台と歯は一体で作られており、後ろの歯の磨滅がやや大きい。小型であり子供用のものと考えられる。長さ18.1cm、幅8.2cm。

櫛(木-2) 背及び肩部は丸味を持つ。背部分が最も厚く歯の先端にむけて薄くする。歯の付け根には歯を挽き出す目安の線がひかれる。

木簡(木-3・4) 木-3は「浄浄」と習書とみられる文字の書かれた木簡。40.2cm×2.0cm×0.7cm。木-4は判読不能。表裏に墨痕が残る。

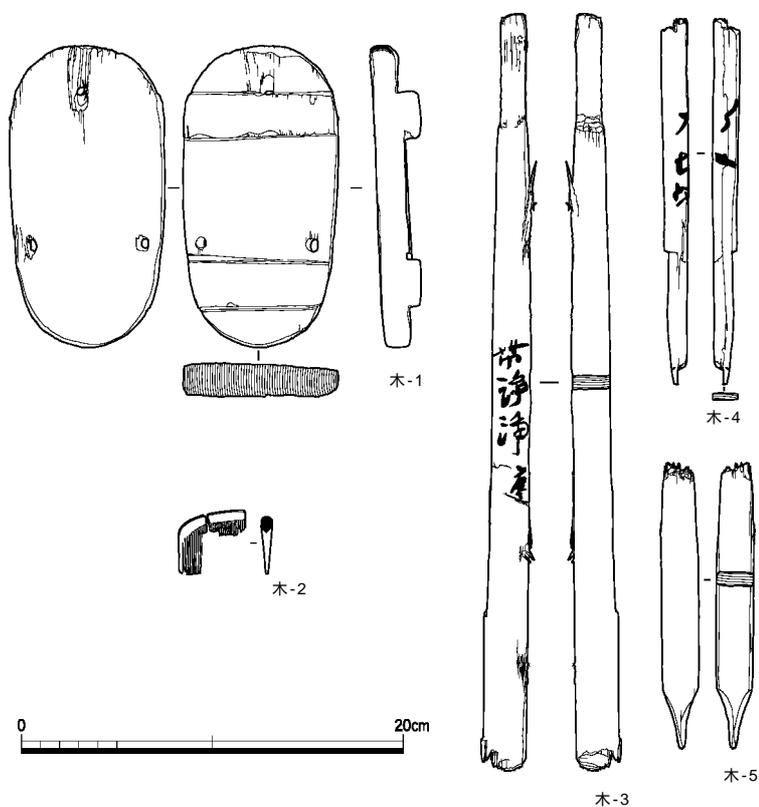


図30 SD19出土木製品実測図(1:4)

木-5は用途不明の木製品。板状の角を面取りし、端部を削り尖らせている。

SG24新出土木製品（図版14、図31）

ここでは特記すべき遺物として紀年名のある題箋が出土している。

題箋（木-6） 片面に「斎衡四年三條」、その左に行を改めてやや小さく「戊戌」と記す。その裏面には「正倉帳」と記されている。池の埋土第2層より出土した。すぐ近くからも付け札などが出土している。

杓子形木製品（木-7） 薄板を杓文字形にケズリ調整する。身と柄の長さはほぼ同じで、身の先端部は半円形、柄の端部も丸味を持たす。

箸（木-8） 割材を粗くケズリ調整し、断面は多角形。一方の先端がやや細い。この他にも小片の箸は多数出土している。

曲げ物（木-9） 円形曲げ物の半分に割れた底板である。側板との接合痕は認められない。

篋状木製品（木-10～16） いずれも用途は不明だが、木-13は刀子状を呈する。木-16は鉤形に曲がる先端を薄く削りだしている。

付け札（木-17・18） どちらも墨書は確認できない。木-18は初期の池を埋め立てた整地層の直下で出土した。

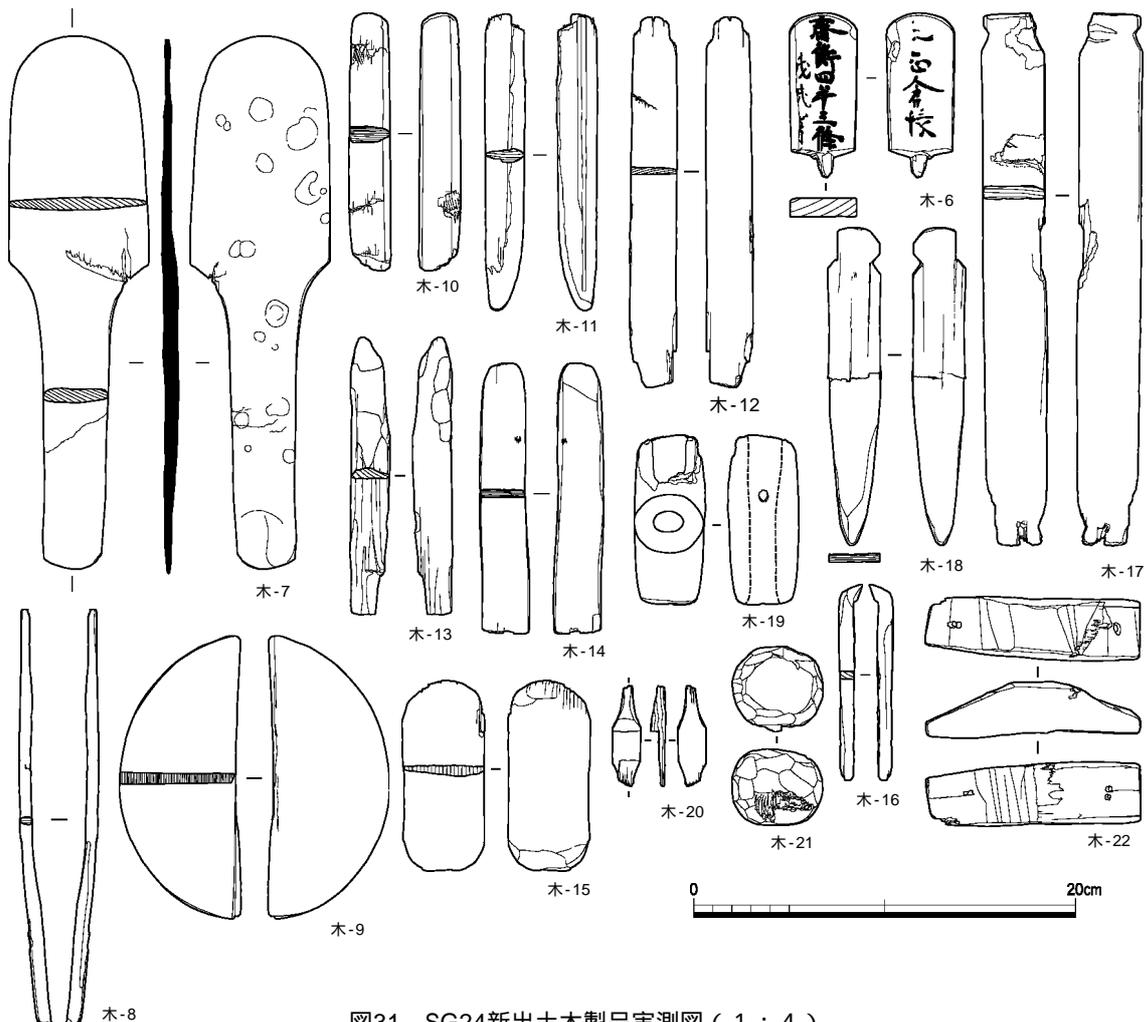


図31 SG24新出土木製品実測図（1：4）

浮子状木製品（木-19） 丸木をくり貫き筒状とし、側面の1箇所に糸を通すような孔を開ける。

糸巻き（木-20） 横木だが軸木を通す孔はない。

木球（木-21） 材を細かく面取りして球形に仕上げている。やや扁平である。

把手状木製品（木-22） 側面は扁平な台形を呈する。両端の薄い部分に釘孔が2箇所ずつ残る。

これら以外に建築部材の端材や杭、用途不明の板状のものなどが出土しているが、図示していない。

表11 遺物概要表

15次調査					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代前期	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入白磁・丸瓦・平瓦		土師器5点・須恵器9点・緑釉陶器4点・灰釉陶器2点・文字瓦1点		
平安時代末期	土師器				
近世以降	土師器・施釉陶器・焼締陶器・染付・磁器				
計		31箱	21点（1箱）	30箱	0箱

16次調査					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
平安時代前期	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入青磁・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鷗尾・木製品		土師器40点・須恵器39点・黒色土器2点・製塩土器15点・輸入青磁2点・軒丸瓦4点・軒平瓦16点・鬼瓦2点・鷗尾1点・文字瓦13点・木筒2点・木製品3点		
平安時代中期～末期	土師器・軒平瓦・丸瓦・平瓦		軒平瓦2点		
近世以降	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・染付・銭貨				
計		46箱	143点（16箱）	6箱	24箱

17次調査					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器・須恵器				
平安時代前期～中期	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入青磁・白磁・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・土製品・木製品・金属製品・植物遺体		土師器30点・須恵器12点・緑釉陶器3点・灰釉陶器1点・白色土器2点・輸入青磁3点・白磁1点・軒丸瓦2点・軒平瓦1点・文字瓦1点・題箋1点・木製品16点・土錘5点・金属製品1点		
平安時代後期	土師器		土師器4点		
近世以降	施釉陶器・焼締陶器・磁器・染付				
計		25箱	83点（4箱）	6箱	15箱

(5) 金属製品

SG24新出土金属製品(図32・33)

金属製品はSG24新埋土中から飾り金具が1点出土している。銅製で、魚子地に花文が表現されている。2箇所に釘孔が開く。外区と釘穴の周囲には魚子を施さない。鍍金の痕跡は確認できない。残存長58.8mm、上下幅12.5mm、厚さ0.6mm、孔径3.3mm。

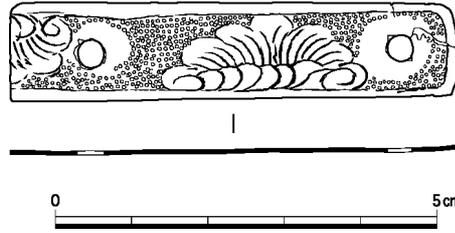


図32 SG24新出土飾り金具実測図(1:1)



図33 SG24新出土飾り金具

註

- 1) 『平安京古瓦図録』 平安博物館 1977年 遺物番号94と同紋
- 2) 『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 遺物番号94と同紋
- 3) 註1の遺物番号321と同範
- 4) 註2の遺物番号7・33・77と同紋
- 5) 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会『大谷中・高等学校内遺跡調査報告書』昭和59年 図版15-5と同範
- 6) 註1の遺物番号396と同範
- 7) 註5の「文字瓦・記号瓦」を参照
- 8) 器種名は、奈良国立文化財研究所の用例による。
- 9) 高台の形態分類は、『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年 による。

4 . 自然遺物の環境考古学分析

17次調査（六町地区）SG24新の埋土より植物遺体が多数出土した。平安京の調査で初出土の蓮の花床、菱の実などの水性植物、樹木では松の毬果、梨や桃などが出土しており、当時の園池やその周辺の景観を彷彿とさせる。採取した土壌サンプルの分析を実施した。その結果を報告する。

（1）花粉分析

原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

試料

試料は、SG24新埋土 2.5 Y 3/1暗茶灰色泥土（試料A）、SG24新埋土 第2層（試料B）、SG24新埋土 2.5 Y 3/3暗茶灰色腐植土（試料C）、SG24旧埋土 2.5 Y 4/2茶灰色泥土（試料D）、SG24旧埋土 2.5 Y 4/2茶灰色泥土（試料最下層D）の計5点である。

方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1）5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は

同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考に、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉31、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉28、シダ植物孢子2形態の計64である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを図に示す。主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属 - アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、カキノキ属、モクセイ科、ニワトコ属 - ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属 - ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、アカバナ科、アリノトウグサ属 - フサモ属、チドメグサ科、セリ科、アサザ属、ナス科、ゴキヅル、タンポポ科、キク科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

各試料において、樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、シイ属と続く。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属の出現率がやや高い。ヨモギ属は上位に向かって減少する傾向を示す。試料A、試料Bからカキノキ属がやや低率に出現し、試料A、B、Cからアサザ属、試料B、Cからソバ属が出現する。他に分析過程で、試料Cからセンダン核が検出された。

花粉分析から推定される植生と環境

平安京跡（二条拠点）の周辺では、森林要素としては、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主に、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、シイ属の樹木が多かった。また、これらは試料採取地点に近接して生育していた可能性もある。試料A、Bの時期では、カキノキ属が、近接した周囲で生育していたとみなされ、植栽と考えられる。他に核の検出されたセンダンも植栽が考えられる。試料採取地点ないし周囲はイネ科やカヤツリグサ科および抽水植物のミズアオイ属（ミズアオイないしコナギ）などが生育し、周囲のやや乾燥したところにヨモギ属を主にチドメグサ亜科などが生育していたと考えられる。各時期とも抽水植物の生育する1 m前後の水深の水域であり、試料A、B、Cの時期には浮葉植物のアサザ属も生育し、1 m以上の水深のところもあったと推定される。試料B、Cからは栽培植物のソバ属が検出され、周囲で畑も営まれていた可能性がある。

（2）珪藻分析

原理

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

試料

試料は花粉分析と同じで、SG24新埋土 2.5 Y 3/1暗茶灰色泥土（試料A）、SG24新埋土 第2層（試料B）、SG24新埋土 2.5 Y 3/3暗茶灰色腐植土（試料C）、SG24旧埋土 2.5 Y 4/2茶灰色泥土（試料D）、SG24旧埋土 2.5 Y 4/2茶灰色泥土（試料最下層D）の計5点である。

方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1 cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）91分類群、真 - 中塩性種（海 - 汽水生種）2分類群、である。計数された珪藻の学名と個数を表に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図に示す。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し、珪藻群集の特徴を記す。

〔貧塩性種〕

Amphora copulata, *Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira* sp., *Cymbella gracilis*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia minor*, *Fragilaria capucina*, *Fragilaria construens* v. *venter*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula confervacea*, *Navicula elginensis*, *Navicula gallica*, *Navicula gallica* v. *laevissima*, *Navicula pupula*, *Neidium ampliatus*, *Pinnularia braunii*, *Pinnularia subcapitata*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

下位より試料最下層Dでは、止水性種で沼沢湿地付着生指標種群の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、流水性種の*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の*Navicula gallica* v. *laevissima*が優占する。試料Dでは流水性種の*Gomphonema parvulum*、止水性種で沼沢湿地付着生指標種群の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、*Eunotia minor*などが優占する。試料A、B、Cでは、止水性種の*Aulacoseira* sp.、沼沢湿地付着生指標種群の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、*Eunotia minor*、流水性種の*Gomphonema parvulum*などが優占する。

珪藻分析から推定される堆積環境

下位より試料最下層Dの時期では、沼沢湿地付着生指標種群の止水性種、流水性種、陸生珪藻が優占し、流水の影響の強い、水草の多く生育する沼沢湿地性の止水域で湿地を伴う環境が示唆される。試料Dの時期になると、流水性種、沼沢湿地付着生指標種群の止水性種などが優占し、流水の影響の強い、水草の多く生育する沼沢湿地性の止水域の環境が示唆される。試料A、B、Cの時期では、止水性種および沼沢湿地付着生指標種群、流水性種などが優占する。流水の影響がやや弱まり、水草の生育する沼沢湿地性の止水域が示唆される。各時期とも概して、流れ込みのある水草の繁茂する池の環境が推定される。

(3) 樹種同定

原理

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

試料

試料は、櫛2点と自然木32点の計34点である。

方法

試料はカミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

結果

結果は表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で丸い、道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5mに達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多く、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

バラ属 *Rosa* バラ科

横断面：やや小型で丸い道管が、ほぼ単独で年輪のはじめに1～2列並び、晩材部では小型の道管が単独でややまばらに存在する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はやや急速に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、数個の直立細胞からなる単列のものと、大型の広放射組織からなる。

以上の形質よりバラ属に同定される。バラ属には、ノイバラ、ヤマイバラなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。低木で、落葉するものが多い。

カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～3個放射方向に複合して、平等に散在する散孔材である。道管の壁は厚い。柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。放射組織は層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属にはヤマガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で平等に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。道管と放射組織間の壁孔きわめて小さい。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、2～4細胞幅の細長い紡錘形であり鞘細胞のあるものが多い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属には、ウツギ、ヒメウツギなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木である。材は木釘などに用いられる。

考察

出土木材は、マツ属複維管束亜属3点、ヤナギ属7点、コナラ属アカガシ亜属1点、イスノキ2点、サクラ属3点、バラ属9点、カキノキ属5点、エゴノキ属1点、ウツギ属3点であった。この内、櫛2点はいずれもイスノキであった。イスノキ材の櫛は奈良時代および平安時代には多い。他はいずれも自然木であり、近隣に生育していたとみられるが、ヤナギ属、エゴノキ属、ウツギ属は水際を好んで生育する樹種である。

(4) 種実同定

原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

試料

試料はE15XU SG24埋土 第2層、E15WU SG24埋土 第1層、E15VT・VU SG24埋土 最下層、SG24埋土 第1層、SG24埋土 第2層(木3-5)、SG24埋土(木4-1)、SG24埋土(木4-4)の7点である。

方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

結果

樹木 5、草本 3 の計 8 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴を記す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。断面は円形である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 堅果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科

淡褐色で扁平楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面は粗い。

ナシ *Pyrus pyrifolia* Nakai 果実 バラ科

黒褐色で球形を呈し、一端が突出している。表面は粗い。

〔草本〕

ヒシ *Trapa dispinosa* Roxb. var. *linumai* Nakano 果実 ヒシ科

黒褐色を呈し、ヒシ特有の角（上位角）の破片が得られた。

ヒメビシ *Trapa incisa* Sieb. et Zucc. 果実 ヒシ科

黒褐色で三角状楕円形を呈し、4本の刺針状の刺がある。

ハス *Nelumbo nucifera* Gaertn. 花托 ハス科

ロート状を呈し、広い一端に果実の数個付く。

考察

マツ属複維管束亜属の毬果10、オニグルミ核1、コナラ属アカガシ亜属堅果1、モモ核12、ヒシ果実1、ヒメビシ果実1、ハス花托1が同定された。樹木ではマツ属複維管束亜属とモモ核が多い。これらは植栽されていた可能性もあるが、モモ核は遺跡では食用となるため最もよく出土する種実である。草本のヒシ、ヒメビシ、ハスいずれも浮葉植物であり、1 m以深の深さの水域に生育する。ハスは植栽された可能性が高い。

(5) 小 結

植生と環境

花粉分析および珪藻分析を行ったSG24新埋土 2.5Y3/1暗茶灰色泥土(試料A)、SG24新埋土第2層(試料B)、SG24新埋土 2.5Y3/3暗茶灰色腐植土(試料C)、SG24旧埋土 2.5Y4/2茶灰色泥土(試料D)、SG24旧埋土 2.5Y4/2茶灰色泥土(試料 最下層D)からみると、平安京跡(二条拠点)の周辺地域には、森林要素としてカシ類(コナラ属アカガシ亜属)を主に、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属の樹木が多い。試料採取地点ないし周囲はイネ科やカヤツリグサ科および抽水植物のミズアオイ属(ミズアオイないしコナギ)などが生育し、周囲のやや乾燥したところにヨモギ属を主にチドメグサ亜科などが生育していたと考えられる。本地点は水深1m前後の水域で、流水の流れ込む水草の生育する池の環境であったとみなされる。種実類からもヒシ、ヒメビシ、ハスの浮葉植物の生育が示唆される。

植栽について

樹木ではカキノキ属、マツ属複維管束亜属(アカマツかクロマツ)、ヤナギ属、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)、サクラ属、モモ、バラ属、センダン、エゴノキ属、ウツギ属が植栽が示唆され、ヤナギ属、エゴノキ属、ウツギ属は水際を好んで生育する樹種であり、後に進入した可能性も高い。池の環境にはハス、ヒシ、ヒメビシ、ミズアオイ属(ミズアオイかコナギ)生育するが、ハスは明らかな植栽が示唆され、ヒシ、ヒメビシ、ミズアオイ属(ミズアオイかコナギ)は池等に入り込みやすい水生植物であり、植栽されたかどうか不明である。

櫛の樹種

SG24(木4-1)出土の櫛2点の樹種は、いずれもイスノキであった。

参考文献

- 中村純(1973)『花粉分析』古今書院 p.82-110
- 金原正明(1993)「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 p.248-262.
- 島倉巳三郎(1973)「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p.
- 中村純(1980)「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p.
- 中村純(1974)「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究 13』p.187-193.
- 中村純(1977)「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学 第10号』p.21-30.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Patrick, R. Eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

小杉正人 (1986)「陸生珪藻による古環境解析とその意義 - わが国への導入とその展望 - 」『植生史研究 第1号』 植生史研究会 p.29-44 .

小杉正人 (1988)「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究 27』 p.1-20 .

安藤一男 (1990)「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理 42』 p.73-88 .

伊藤良永・堀内誠示 (1991)「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌 6』 p.23-45 .

佐伯浩・原田浩 (1985)「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.20-48 .

佐伯浩・原田浩 (1985)「広葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.49-100 .

笠原安夫 (1985)『日本雑草図説』 養賢堂 494p .

笠原安夫 (1988)「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究第2巻生業』 雄山閣 p.131-139 .

南木睦彦 (1991)「栽培植物」『古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ』 雄山閣 p.165-174 .

金原正明 (1996)「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル 409』 ニューサイエンス社 p.15-19 .

表12 花粉分析結果

分類群	学名	和名	SG24新	SG24新	SG24新	SG24H	SG24H
			埋土 試料A	埋土 試料B	埋土 試料C	埋土 試料D	埋土 試料D(最下層)
Arboreal pollen		樹木花粉					
	<i>Abies</i>	モミ属	3	5		1	2
	<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	1	1	1	
	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	20	15	24	22	9
	<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属			1		
	<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	25	45	28	49	39
	<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	2	2	3	2	2
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	19	11	24	23	22
	<i>Salix</i>	ヤナギ属	1				
	<i>Myrica</i>	ヤマモモ属		2			
	<i>Juglans</i>	クルミ属	1				
	<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1			
	<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ			1		
	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	1	1	10	12
	<i>Betula</i>	カバノキ属	2	4	8	4	6
	<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	2	9	2	3
	<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	4	11	12	6
	<i>Castanopsis</i>	シイ属	13	14	6	16	14
	<i>Fagus</i>	ブナ属	3	1	1	1	2
	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	7	8	13	18	6
	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	34	59	37	74	58
	<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	4		5	2
	<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	3	1	3	7	6
	<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ		1		1	
	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1		1		
	<i>Rhus</i>	ウルシ属	1				
	<i>Ilex</i>	モチノキ属	1				
	<i>Acer</i>	カエデ属			2		
	<i>Vitis</i>	ブドウ属	2	2			1
	<i>Diospyros</i>	カキノキ属	16	26	2		
	Oleaceae	モクセイ科				1	
	<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	35	5	24	2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉					
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	2	1	2	3
	Rosaceae	バラ科	1	2	1		
	Leguminosae	マメ科			2	1	
Nonarboreal pollen		草本花粉					
	<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1			
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	3	4	3	3	
	Gramineae	イネ科	102	95	86	80	85
	<i>Oryza type</i>	イネ属型	26	13	11	8	5
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	42	32	28	33	21
	<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ		3	4		
	<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	28	34	23	21	12
	<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	4	1	1	1
	<i>Rumex</i>	ギシギシ属			1		
	<i>Eragrostis</i>	ソバ属		1	1		
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	2	3	3	2
	Caryophyllaceae	ナデシコ科		2	2		1
	Cruciferae	アブラナ科	4	2	1	1	1
	<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属		1	1	1	
	<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属			1	1	
	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ		1			
	Onagraceae	アカバナ科				1	3
	<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属				1	
	Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	12	5	11	10	3
	Apioidae	セリ亜科	2	2	2	2	2
	<i>Nymphoides</i>	アサザ属	3	3	2		
	Solanaceae	ナス科			1		2
	<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキツル	1	1	1		
	Lactuoidae	タンポポ亜科		2	4	1	2
	Asteroidae	キク亜科	4	3	1	6	2
	<i>Xanthium</i>	オナモミ属		1			
	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	19	29	36	45	63
	<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ			1		
Fern spore		シダ植物胞子					
	Monolate type spore	単条溝胞子	5	9	3	12	7
	Trilate type spore	三条溝胞子	11	11	23	7	
Arboreal pollen		樹木花粉	200	215	200	251	191
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	4	4	4	3	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	249	241	224	218	205
Total pollen		花粉総数	453	460	428	472	399
		試料1cm ³ 中の花粉密度	7.4	5.4	6.8	3.6	8.2
			×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ³
Unknown pollen		未同定花粉	11	3	6	6	3
Fern spore		シダ植物胞子	16	20	26	19	7
Helminth eggs		寄生虫卵			1		
	<i>Ascaris</i>	回虫卵			1		
	<i>Trichuris</i>	鞭虫卵		3	1		3
Total		計	0	3	2	0	3
		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0	30	40	0	18
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

*Cよりセンダン核検出

表13 珪藻分析結果

分類群	SG24新埋土	SG24新埋土	SG24新埋土	SG24旧埋土	SG24旧埋土
	試料A	試料B	試料C	試料D	試料D(最下層)
貧塩性種 (淡水生種)					
<i>Achnanthes exigua</i>		1	1		
<i>Achnanthes hungarica</i>	3	3	6		1
<i>Achnanthes lanceolata</i>					1
<i>Actinella brasiliensis</i>	1	2			
<i>Amphora copulata</i>	5	9	8	1	1
<i>Amphora</i> sp.		2			
<i>Anomoeoneis</i> sp.				1	
<i>Aulacoseira canadensis</i>	16	18	13		
<i>Aulacoseira granulata</i>	6	12	6		
<i>Aulacoseira</i> sp.	28	40	40	1	
<i>Caloneis bacillum</i>		1			
<i>Caloneis silicula</i>	3	2	6	1	1
<i>Caloneis</i> sp.				1	
<i>Cyclotella</i> sp.			2	1	
<i>Cymbella gracilis</i>	9	6	17	5	
<i>Cymbella lanceolata</i>	1				
<i>Cymbella minuta</i>		3	1	2	
<i>Cymbella naviculiformis</i>	7	2	7	4	5
<i>Cymbella silesiaca</i>	8	2	12	10	3
<i>Cymbella tumida</i>		1	1	1	
<i>Eunotia bilunaris</i>			4	1	2
<i>Eunotia diodon</i>		1			1
<i>Eunotia minor</i>	35	34	53	12	2
<i>Eunotia naegelii</i>					4
<i>Eunotia parallela</i>	1				
<i>Eunotia sudetica</i>			5	1	
<i>Fragilaria capucina</i>	5	1	16	1	6
<i>Fragilaria construens</i>		3			1
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>subsatina</i>			4	1	
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>venter</i>	9	18	5	1	2
<i>Fragilaria nitzschioidea</i>			2		
<i>Fragilaria</i> spp.			1		
<i>Fragilaria</i> sp.		2			
<i>Frustulia rhomboidea</i> v. <i>saxonica</i>	4		3	1	3
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1	2	1	5	1
<i>Gomphonema angustum</i>		1			
<i>Gomphonema augur</i>	3				
<i>Gomphonema gracile</i>	8	4	7	3	5
<i>Gomphonema gracile</i>	5	1	8		2
<i>Gomphonema minutum</i>					
<i>Gomphonema parvulum</i>	26	17	55	36	16
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>	2	4	1	1	2
<i>Gomphonema truncatum</i>	1	1	1		1
<i>Gyrosigma</i> sp.					2
<i>Hantzschia amphioxys</i>			2	1	1
<i>Navicula americana</i>	1	1			
<i>Navicula bacillum</i>		1			
<i>Navicula confervacea</i>	10	6	13		
<i>Navicula contenta</i>		1	2		
<i>Navicula cryptotenella</i>					1
<i>Navicula cuspidata</i>	1				1
<i>Navicula cuspidata</i>	5	1	11	1	2
<i>Navicula elginensis</i>	6		4	19	4
<i>Navicula gallica</i>					9
<i>Navicula gallica</i> v. <i>laevissima</i>		9			
<i>Navicula mutica</i>	1	1	2		
<i>Navicula pupula</i>	29	26	38	2	5
<i>Navicula radiosa</i>	2		1	6	2
<i>Navicula tokyoensis</i>			1		
<i>Navicula viridula</i> v. <i>rostellata</i>			2		
<i>Neidium affine</i>	1	2	1	1	1
<i>Neidium ampliatus</i>	5	3	4	1	5
<i>Neidium dubium</i>		2	1		2
<i>Nitzschia brevissima</i>		1			3
<i>Nitzschia nana</i>	1				1
<i>Nitzschia palea</i>			1		1
<i>Nitzschia recta</i>					1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>			2	5	
<i>Pinnularia balatomis</i>			2		
<i>Pinnularia borealis</i>	1				
<i>Pinnularia braunii</i>	6	4	9		2
<i>Pinnularia gibba</i>	3	2	6	2	3
<i>Pinnularia interrupta</i>	4				
<i>Pinnularia major</i>	1			1	
<i>Pinnularia microstauron</i>	3	3	7	2	2
<i>Pinnularia platycephala</i>				1	
<i>Pinnularia</i> spp.	3				
<i>Pinnularia</i> sp.			6	1	1
<i>Pinnularia subcapitata</i>	2	3	9	2	3
<i>Pinnularia viridis</i>	1	2	1		
<i>Rhopalodia gibberula</i>			2		
<i>Stauroneis anceps</i>		1			
<i>Stauroneis nobilis</i>	1		2	1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	2		3	4	2
<i>Stauroneis smithii</i>		1			
<i>Stauroneis</i> sp.			1		
<i>Surirella angusta</i>	1				
<i>Surirella ovata</i>					2
<i>Surirella robusta</i>					1
<i>Surirella</i> sp.			2		
<i>Surirella tenera</i>					1
<i>Synedra una</i>			1	2	1
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	33	19	23	12	21
真-中塩性種 (海-汽水生種)					
<i>Nitzschia constricta</i>				1	6
<i>Nitzschia levidensis</i> v. <i>victoriae</i>					1
合計	310	286	445	156	147
未同定	18	19	51	18	16
破片	122	144	192	87	90
試料1 cm ³ 中の殻数密度	8.4	3.7	6.3	2.2	1.6
	×10 ⁶	×10 ⁶	×10 ⁶	×10 ⁶	×10 ⁶
完形保存率 (%)	72.9	67.9	72.1	66.7	64.4

表14 樹種同定結果

分類群	和名										
	木2-5 SG24 自然木	木3-3 SG24 自然木	木3-4 SG24 自然木	木3-6 SG24 自然木	木4-1 SG24 榊	木4-1 SG24 自然木	木4-1 SG24 自然木	木4-6 SG24 自然木			
マツ属 維管束亜属		1		1		1					
ヤナギ属		4	2			1					
コナラ属 アカガシ亜属				1	2						
イスノキ											
サクラ属		2				1					
バラ属	7										
カキノキ属		4	1								
エゴノキ属						1					
ウツギ属		3									
合計	7	14	3	2	2	4					

表15 種実同定結果

分類群	和名										
	木2-5 SG24 自然木	木3-3 SG24 自然木	木3-4 SG24 自然木	木3-6 SG24 自然木	木4-1 SG24 榊	木4-1 SG24 自然木	木4-1 SG24 自然木	木4-6 SG24 自然木			
樹木											
マツ属 維管束亜属		1	3		4						
* オニグルミ		1									
* コナラ属 アカガシ亜属		1									
** モモ			1	1		6	3	1			
** ナシ											
草本											
ヒシ											
ヒメビシ											
ハス											
合計		5	5	1	4	6	3	4			
不明種実		破片(1)									
その他		枝(+)									
** 栽培植物		枝(+)									
** 有用(食用)植物		枝(+)									

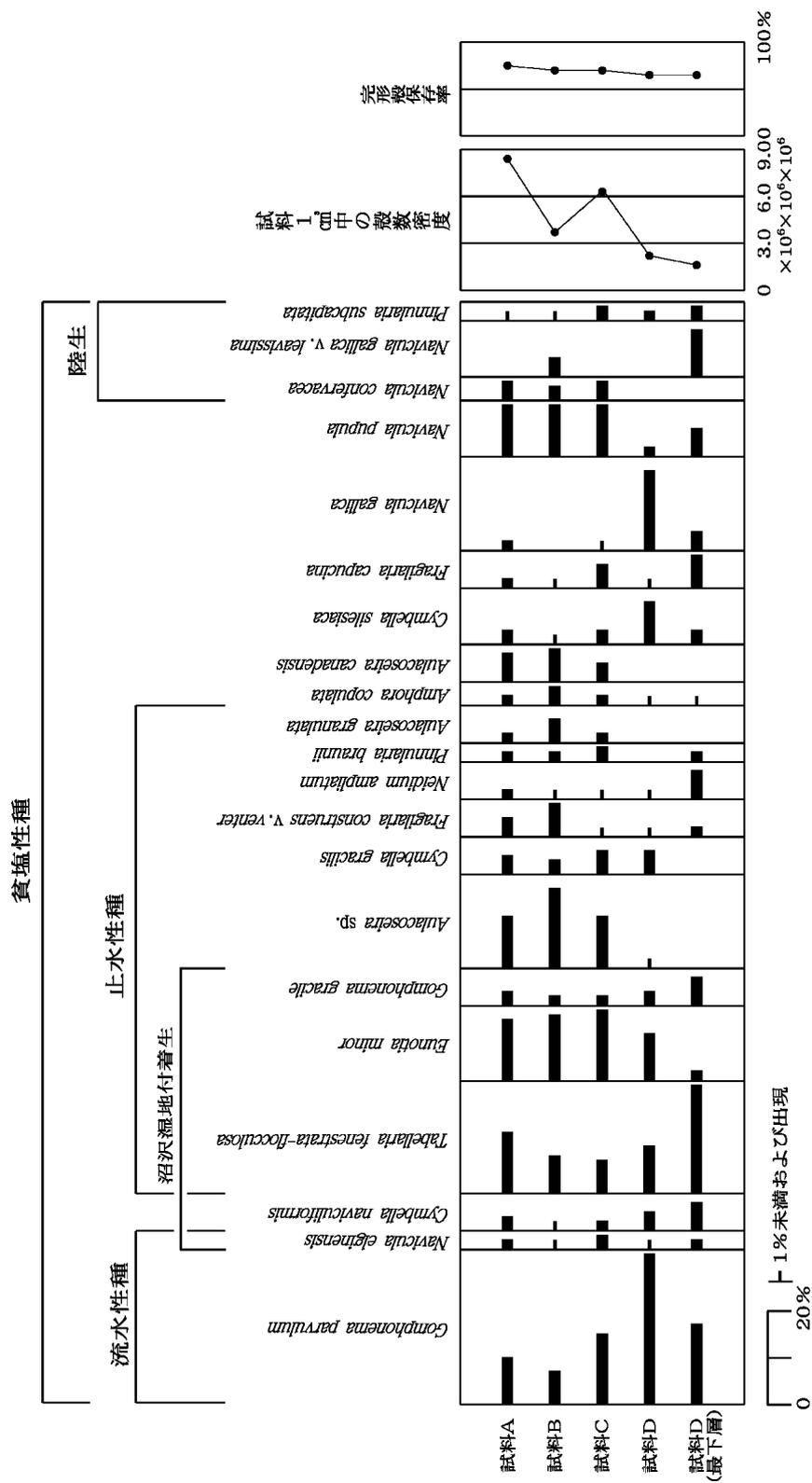


図35 主要珪藻ダイアグラム

5.まとめ

今回の調査では、それぞれの調査区で平安時代前期の遺構が比較的良好な状態で検出された。前述したように三町は右京職、六町は西三条第、七町は穀倉院に比定される。以下、各町ごとの成果の概略を述べ、まとめにかえたい。

三町の調査の成果は、右京職の西北角及び築地や側溝など条坊関連の遺構の確認ができた事である。右京職に関連する6次調査¹⁾、13次調査²⁾、平成13年度の調査³⁾でそれぞれ姉小路両側溝、三条坊門小路両側溝、朱雀大路西側溝が確認されており、今回の西坊城小路東側溝の検出により右京職の四周の側溝位置が明らかとなった。溝幅については姉小路北側溝・朱雀大路西側溝が幅約4m、三条坊門小路南側溝・西坊城小路東側溝は3m以上あり、延喜式記載の小路側溝幅三尺とは異なり幅広く改修されている。各側溝は平安時代末期から鎌倉時代まで機能していたようである。また築地瓦落ちの遺物の年代観から、築地の廃絶は9世紀末から10世紀にかけての時期と推定できる。これまでに三町域の調査はかなり進み右京職の実態が徐々に解明されつつあるが、建物の配置や右京職が衰退した後の土地利用については、まだ不明な点が多く今後の課題として残されている。

七町の調査区は、4町範囲を占めるとされる穀倉院の西南部の1町の南東隅に位置する。穀倉院内の小路について述べると、今回は東側の二町との間の西坊城小路は、現道路と重複するため明らかにできなかった。ただし七町の南面築地は明確に認められたが、東面築地位置にはその痕跡は検出されていない。また、1993年度に実施された二町部分の試掘調査⁴⁾では西坊城小路及び押小路推定位置で路面や側溝等の遺構は検出されていない。これらの事実から穀倉院の中には小路が敷設されていなかった可能性が深まった。建物SB20については、1997年度の調査⁵⁾でこの建物の真北に同規模の南北棟建物を検出しており、計画的に配置された穀倉院の建物群のひとつであることがわかる。また、斜行溝SD22・SD23は、溝底部の標高からすると自然地形に逆らい北西方向に流れたとみられ、上記の調査で検出された穀倉院内の池に注ぐものと考えられる。

この地区の平安時代の遺構については遺物の年代観からSD19が最も古い。SD19は堆積状況や出土土器類の型式のまとまりからみて比較的短期間で埋まっている事が想定できる。SD19の土器型式は平安京 期中に該当し、その中でもやや新しい様相を持つ土器群である。一方、穀倉院は『西宮記』巻八裏書の「或抄」によれば、大同年間(806～810)に設置されたとあり、平安京 期中の年代観780～810年頃の後半と、ほぼ一致している。これらのことからSD19は穀倉院成立直前あるいは造営時に埋め戻された溝である可能性が高い。

六町の調査では、1995年度に実施した8次調査⁶⁾で確認された洲浜の対岸と池跡と、14次調査⁷⁾でその一部が確認されていた建物跡や柵列などを検出した。洲浜を有する池は2時期確認され平安時代初頭から10世紀頃まで続いていたことがわかった。後期の池からは多様な植物遺体が検出されている。建物は東西6間の規模であることが確認できた。この建物は東西の柱間が3.0m等間であるが、南北の柱間は3.6mと大きく、おそらく底部分を検出したものと思われる。しかし身舎部

の南側柱筋に当たる部分に柱穴がないことから、庇部分のみが掘立柱で、身舎は2間×4間の礎石建物であった可能性がある。このような建物の例は1997年度の右京職の調査や、宇多院跡⁸⁾、右京六条一坊十四町⁹⁾でもみられる

15次調査の調査区東端では西坊城小路に関連する遺構の検出も期待できたが、ここでは確認することはできなかった。

前述したように六町は『拾芥抄』右京図によると右大臣藤原良相の第宅「西三条第」とされ、百花亭とも称する。三代実録によると、貞観元年（859）四月、皇太后藤原順子が東宮より当邸に遷御、ほぼ一年間の滞在の後、翌年四月東五条第に帰る。同八年三月には、清和天皇が当邸に行幸し、桜花の宴を開いて文人に百花亭の詩を賦せしめている。その後の当邸の伝領・消息は全く不明とされているが、散位従四位下大江公仲が嘉保二年（1095）に残した財産処分状には、西三條地壹町在右京三条一坊六町、建三間四面屋一字（平安遺文第1338号）と記されている。

しかし「西三条第」の位置については諸説あり、『拾芥抄』（『故実叢書』）諸名所部第20には「三条北朱雀西、良相大臣家、俗云百夜（衣）公事」としている。また「二中歴」（『史籍集覧』）第10、名家歴にも「西三条 朱雀西三条北良相公家」とされ四町に該当すると解釈できる。別の史料では『今昔物語集』に「西三条ノ右大臣ト申ス人御ケリ、...大臣ノ家ノ西ノ大宮ヨリ八東、三条ヨリ八北、此レヲ西三条ト云フ」とあることや、大江公仲の財産処分状には、六町にたいして西三條地との記述があることから「三条北朱雀西」は必ずしも三条・朱雀の角地である四町1町を示すものでなく三条一坊全体を表すものとも考える事ができる。

今回の調査では確認できた園池や建物の規模、出土土器の構成などから六町が1町全域を占めた有力な邸宅であったことがうかがえる。

注目すべき遺物のひとつに紀年銘のある題箋がある。紀年の斎衡四年（857）は二月二十一日に天安と改元され、改元とほぼ同時期に西三条第（百花亭）の主、藤原良相が右大臣となっている。戊戌は斎衡四年の干支とは合わない。裏面の正倉については、この六町に北接して穀倉院が、また東隣には右京職が所在したことから、それら官衙施設との関連が窺えるが、この地が西三条第の推定地のひとつであることから、それに関係する可能性もあながち否定できない。この場合、紀年に続く「三條」の解釈が問題となろう。「三條」はなんらかの単位ととらえることもできるが、良相が西三条大臣とも称され、その娘の文徳女御である多賀幾子が西三条女御（天台南山無動寺建立和尚伝）、清和女御多美子も西三条女御（和尚伝）、息子の常行（836～875）も西三条右大将（公卿補任 貞観17年）と称されていたことなどからも、「三條」の意味については充分検討する必要がある。

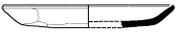
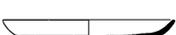
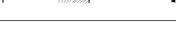
SG24新から出土した土器類の型式は平安京 期中（870～900頃）の古相に該当し、紀年銘の斎衡四年（857）よりやや新しいものであるが、題箋に書かれた文書が一定期間保存されることを考慮すれば、この年代の差は矛盾するものではなく、また西三条第の消息が不明になる頃と一致することからも、この地が「西三条第」の有力な推定地のひとつである可能性は否定できない。今後ともこの地域の調査により新たな成果が得られることが期待できる。

註

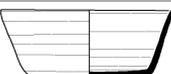
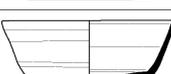
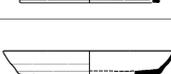
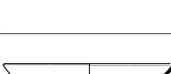
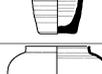
- 1) 吉村正親「10 平安京右京三条一坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 (道路部分 - 6次)
- 2) 伊藤 潔「13 平安京右京三条一坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年 (駅広場 - 13次)
- 3) 平尾政幸『平安京右京三条一坊三町(右京職)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3 2002年 (平安時代末頃に埋まった幅4mの大路西側溝及び築地を90mにわたり検出。)
- 4) 平田 泰「4 平安京右京三条一坊6」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 (西坊城小路、押小路南側溝未検出)
- 5) 吉村正親「16 平安京右京三条一坊4」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年 (御池通)
- 6) 伊藤 潔「3 平安京右京三条一坊2」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年 (池 - 8次)
- 7) 伊藤 潔「10 平安京右京三条一坊1」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年 (建物 - 14次)
- 8) 「住宅公園花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
- 9) 平尾政幸「14 平安京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年

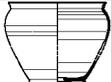
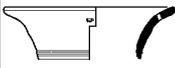
付表1 SD19出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
1		土師器碗A I	13.0	3.5		10YR7/3 にぶい黄橙色	1/6残存 外面は煤けている 内面ナデ 外面ケズリ
2		土師器碗A I	13.8	3.4		7.5YR7/3 にぶい橙色	2/5残存
3		土師器碗A I	14.2	3.8		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/4残存 外面と内面底部は煤けている
4		土師器碗A I	14.2	(3.7)		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/4残存
5		土師器碗A I	14.6	4.5		7.5YR7/3 にぶい橙色	3/4残存 外面底部のみケズリ
6		土師器碗A I	14.8	3.9		7.5YR6/4 にぶい橙色	1/2残存 内外共に煤けている
7		土師器杯A	16.3	3.4		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/6残存
8		土師器杯A	17.4	3.7		10YR8/3 浅黄橙色	胎土密 細粒 焼成良好
9		土師器杯A	17.7	4.0		5YR8/2 灰白色	1/4残存 胎土密 細粒 雲母微細粒含む
10		土師器杯A	17.8	3.4		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/3残存 胎土に赤褐色粒含む
11		土師器杯A	18.0	3.6		7.5YR5/4 にぶい褐色	1/4残存
12		土師器杯A	18.1	3.7		5YR7/4 にぶい橙色	1/4残存
13		土師器杯A	18.2	3.5		7.5YR8/2 灰白色	1/6残存
14		土師器杯A	18.2	3.5		10YR5/4 にぶい黄褐色	1/3残存
15		土師器杯A	18.2	3.8		10YR8/2 灰白色	1/6残存
16		土師器杯A	18.2	4.0		10YR8/2 灰白色	2/5残存
17		土師器杯A	18.2	4.5		7.5YR6/4 にぶい橙色	2/3残存
18		土師器杯A	19.2	4.0		5YR8/2 灰白色	1/6残存 胎土密 細粒 雲母微細粒含む
19		土師器杯B	18.8	5.0	10.1	2.5Y8/2 灰白色	2/5残存 外面ケズリ後ミガキ 器表は摩滅激しい
20		土師器皿A II	15.0	2.1		7.5YR8/3 浅黄橙色	外面の一部に煤附着

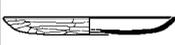
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
21		土師器ⅢAⅡ	15.8	2.1		7.5YR7/4 にぶい橙色	1/4残存 外面ヘラケズリ
22		土師器ⅢAⅡ	16.4	2.3		5YR6/6 橙色	1/5残存 外面ヘラケズリ
23		土師器ⅢAⅡ	16.0	1.9		5YR6/6 橙色	1/6残存 内外面ナデ調整
24		土師器ⅢAⅡ	16.2	1.8		10YR8/2 灰白色	1/6残存
25		土師器ⅢAⅡ	16.8	2.0		10YR8/2 灰白色	口縁部1/5残存
26		土師器ⅢAⅡ	17.2	2.1		10YR8/3 浅黄橙色	1/6残存
27		土師器ⅢAⅡ	17.4	2.3		10YR6/2 灰黄褐色	1/3残存
28		土師器ⅢAⅠ	18.8	2.4		5YR5/4 にぶい赤褐色	1/5残存 外面ヘラケズリ 胎土やや密 雲母微細粒含む 河内産
29		土師器ⅢAⅠ	19.2	2.4		10YR7/3 にぶい黄橙色	1/8残存
30		土師器ⅢAⅠ	21.4	2.8		10YR8/2 灰白色	1/4残存
31		土師器蓋	23.4	2.5		7.5YR8/3 浅黄橙色	1/2強残存 天井部4方向 口縁部6方向のミガキ
32		土師器甕	12.5			10YR8/2 灰白色	向かい合う2方向に耳が付く 胎土粗 外面に煤附着
33		土師器甕	14.2			10R5/3 赤褐色	外面に煤附着
34		土師器甕	14.1			7.5YR7/3 にぶい橙色	外面に煤附着
35		土師器甕	17.3	10.8		10YR6/3 にぶい黄橙色	外面タタキ後ハケメ調整
36		土師器甕	16.2			5YR6/4 にぶい橙色	胎土粗 内面底部から上方にカキトリ 外面ハケメ調整
37		土師器甕	26.3			7.5YR6/2 灰褐色	胎土細粒 雲母微細粒含む 外面に煤附着
38		土師器甕	27.3			10YR7/3 にぶい黄橙色	胎土細粒 雲母微細粒含む
39		土師器甕	28.4			5YR6/3 にぶい橙色 断面暗灰色	胎土細粒 外面に煤附着
40		土師器甕	30.5			5YR7/4 にぶい橙色	胎土密・細粒 外面に煤附着

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
41		黒色土器杯	14.0	3.8		7.5YR5/3 にぶい褐色	内面ミガキ密 暗文 外面ケズリ後粗いミガキ 内面のみ黒色
42		黒色土器杯	28.6	7.0		5Y2/1 黒色	内外面とも黒色 密なミガキ 内面に暗文
43		須恵器蓋	13.9	2.9		5B7/1 明青灰色	胎土密・細粒 焼成良好
44		須恵器蓋	13.9	残1.1		5B7/1 明青灰色	転用硯
45		須恵器蓋	13.6	残1.0		5B6/1 青灰色	胎土粗 白色砂粒を多く含む 焼成良好
46		須恵器蓋	18.2	残1.6		5B7/1 明青灰色	胎土密・細粒 焼成良好
47		須恵器蓋	16.3	残1.8		5B6/1 青灰色	転用硯
48		須恵器蓋	18.9	2.6		5B7/1 明青灰色	転用硯
49		須恵器蓋	19.1	1.9		N7/0 灰白色	胎土密、焼成良好 内面に墨付着 一部筆跡を残す
50		須恵器蓋	23.0	残2.4		5Y8/1 灰白色	胎土密・細粒 やや砂質
51		須恵器蓋	23.8	残2.5		N7/0 灰白色	天井部は緩やかに広がり、口縁部と天井部との境は明瞭でない
52		須恵器杯A	12.2	3.8	9.5	2.5Y8/1 灰白色	胎土密 焼成甘く軟質
53		須恵器杯A	12.6	3.5	8.0	N7/0 灰白色	口縁端部に煤付着 胎土密・細粒 焼成良好
54		須恵器杯A	13.2	3.1	7.9	7.5Y8/1 灰白色	胎土細粒・密 焼成甘く軟質
55		須恵器杯A	13.3	3.7	9.1	N7/0 灰白色	1/2残存、胎土密、焼成良好 底部外面に「厨」の墨書あり
56		須恵器杯A	13.6	3.8	9.2	7.5Y8/1 灰白色	2/3残存 焼成甘い 外側底部ヘラオコシ 外側に墨付着
57		須恵器杯A	14.1	3.8	9.7	5Y7/1 灰白色	胎土密 焼成甘くやや軟質
58		須恵器杯A	14.4	3.9		5Y8/1 灰白色	1/2残存 焼成甘い 外側底部ヘラオコシ 墨付着
59		須恵器杯B	11.5	4.0	8.5	N7/0 灰白色	1/3残存 焼成良好 胎土白色砂粒多い
60		須恵器杯B	14.2	5.0	10.1	5PB7/1 明青灰色	1/2強残存 焼成良好 外側底部ヘラオコシのちナデ 転用硯

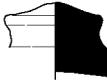
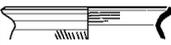
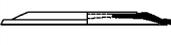
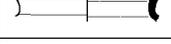
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
61		須恵器杯B	14.9	5.5	11.2	N7/0 灰白色	1/3残存 焼成良好
62		須恵器杯B	15.6	6.2	11.0	2.5Y8/1 灰白色	1/5残存 焼成甘い 高台内部に「厨」の墨書あり
63		須恵器杯B	16.2	6.8	11.6	5B7/1 明青灰色	胎土 砂粒を多く含む
64		須恵器杯B	18.4	7.0	13.8	N6/0 灰色	胎土密 焼成良好
65		須恵器杯B	19.3	7.5	13.1	N7/0 灰白色	胎土密 焼成良好
66		須恵器杯B	-	-	13.3	N6/0 灰色	1/8残存 焼成良好 胎土密
67		須恵器皿	18.3	2.6	14.0	N6/0 灰色	胎土密 焼成良好
68		須恵器皿	18.8	2.1	14.0	5B7/1 明青灰色	胎土密 細粒 焼成良好
69		須恵器皿	19.8	1.8	17.0	7.5Y7/1 灰白色	胎土密 細粒
70		須恵器皿	19.8	2.3	17.7	N6/0 灰色	1/8残存 焼成良好 外側底部ヘラオコシ
71		須恵器壺	4.4	10.0	4.0	10Y5/1 灰色	口縁部1/3残存 体部完形 胎土密 焼成良好 肩部に降灰あり 高台はケズリ出し
72		須恵器壺			4.6	5Y7/1 灰白色	胎土密
73		須恵器壺			6.0	5P B5/1 青灰色	胎土密 焼成良好
74		須恵器壺			7.2	10Y7/1 灰白色	胎土密 焼成良好
75		須恵器壺			9.4	N7/0 灰白色	胎土密 焼成良好
76		須恵器壺G			4.0	N8/0 灰白色	焼成甘く軟質
77		須恵器壺	12.1	15.4		N4/0 灰色 (内面5B5/1 青灰色)	胎土密 焼成良好 外面に灰がかかる
78		須恵器壺	16.0			N7/0 灰白色	肩部に降灰
79		須恵器平瓶	4.0			N7/0 灰白色	天井部に降灰
80		須恵器壺	12.4	21.1	14.0	7.5Y6/1 灰色	全面に灰がかかり厚い部分は剥離する

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
81		須恵器鉢	26.8		15.6	2.5Y8/2 灰白色	胎土細粒 焼成甘く軟質
84		弥生土器壺	17.8			2.5Y7/2 灰黄色	口縁部に孔を穿ち頸部に削りだしによる 凸帯をめぐらす

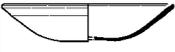
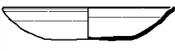
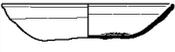
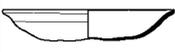
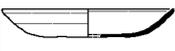
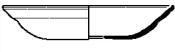
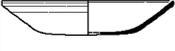
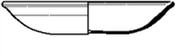
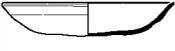
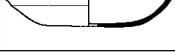
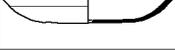
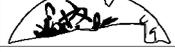
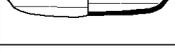
付表2 SG24旧出土掲載土器一覧表

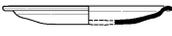
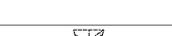
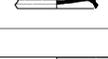
No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
86		土師器碗A I	13.4	3.5		7.5YR6/4 にぶい橙色	1/4残存 外面ケズリ 内面ナデ
87		土師器杯A	18.6	3.1		5YR6/3 にぶい橙色	1/4残存
88		土師器杯A	18.3	(4.0)		10YR7/3 にぶい黄橙色	1/12残存
89		土師器皿A I	20.6	2.1		10YR8/1 灰白色	1/6残存
90		土師器甕	15.6	(15.0)		5YR6/3 にぶい橙色	1/5残存 内面上部はオサエ後ナデ 下部は粗くカキ トリ 外面は幅1.5mmほどのハケメ調整
91		須恵器杯蓋	13.4			5PB7/1 明青灰色	1/6残存 外面降灰 重ね痕あり
92		須恵器杯蓋	14.0			N7/0 灰白色	1/6残存 外面天上部ヘラオコシ 重ね痕あり 小片のため口径不安
93		須恵器杯蓋	14.4	1.9		N7/0 灰白色	1/12残存 外面天上部ヘラオコシ
94		須恵器杯B			9.6	5Y5/1 灰色	1/3残存 転用硯 高台周辺に墨の痕あり
95		須恵器杯B	15.3	5.5	11.0	5PB7/1 明青灰色	1/3残存 転用硯 高台内墨付着
96		須恵器杯B			11.3	2.5Y6/2 灰黄色	高台1/5弱残存
97		須恵器杯B			12.1	5R7/1 明赤灰色	高台部は1/6残存 転用硯

付表3 SX05出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
98		土師器杯B			13.6	10YR6/3 にぶい黄橙色	高台部分1/8残存 胎土密 細粒 高台は貼付け
99		土師器蓋 (つまみ)				7.5YR7/3 にぶい橙色	ツマミ部分は100%残存 胎土密 細粒 ツマミは貼付部分で剥離
100		土師器甕	14.6			5YR5/6 明赤褐色	口縁部のみ1/8残存 胎土砂質、やや細粒 外面の調整不明
101		土師器甕	26.6			2.5Y8/3 淡黄色	口縁部1/8残存 胎土粗く砂粒多く含む 内面口縁部ハケメ調整 体部との境カキトリ 外面体部ハケメ調整
102		土師器羽釜	23.8			10YR6/4 にぶい黄橙色	口縁部1/6残存 胎土粗く砂粒多く含む 外面に煤付着 摩滅激しく調整は不明
103		須恵器蓋	14.0	(1.6)		N6/0 灰色	1/6残存 胎土密 焼成良好 天井部ヘラオコシ 硯に転用
104		須恵器蓋	16.8	1.25		10YR7/1 灰白色	1/6残存 胎土密 焼成良好 硯に転用
105		須恵器杯B	19.8	7.0	13.0	N7/0 灰白色	1/8残存 胎土は滑らか
106		須恵器壺	6.8			7.5Y7/1 灰白色	胎土やや密 焼成良好硬質 器表に暗灰色の降灰あり 頸部内面に絞り目が認められる
107		須恵器壺G	7.0		4.6	N8/0 灰白色	胎土細粒 焼成甘く軟質 器表は摩滅激しい
108		須恵器甕	17.2			5PB7/1 明青灰色	口縁部1/8残存 胎土密 焼成良好 外面に降灰あり
109		須恵器甕	20.4			N8/0 灰白色	口縁部のみ1/8残存 鉄分や雲母の吹き出しが多い 内面に降灰あり
110		須恵器 擂鉢			8.6	2.5Y7/1 灰白色	胎土密 焼成やや甘い 底部に糸切り痕あり 内部は降灰あり滑らか (使用痕)
111		須恵器 風字硯		4.2		2.5GY5/1 オリーブ灰色	8 cm×6 cm残存 脚部はヘラで面取り 上面艶あり、裏面に自然釉
112		緑釉陶器碗 山城系			6.1	2.5Y8/2 灰白色	高台部分1/2残存 全釉 胎土密 非常に軟質
113		緑釉陶器碗 近江系			7.4	濃緑色	高台部分1/2残存 全釉 素地は須恵質 高台内糸切り 内面にトチン痕 素焼時の重ね痕あり
114		緑釉陶器皿 山城系			6.1	10Y6/2 オリーブ灰色	高台部分1/5残存 全釉 釉はやや薄い 焼成やや硬質 内面に重ね痕あり
115		緑釉陶器碗 東海系	17.8	(6.1)		2.5Y7/1 灰白色 釉 明黄緑色	1/4残存 全釉 全面ミガキ釉厚 外面の口縁部と底部付近に2本ずつ沈線あり 内面にひつつき痕
116		灰釉陶器碗			6.7	5YR8/1 灰白色	高台部分は完形 内面底部・外面以外に薄く刷毛塗り施釉 高台内ナデ
117		灰釉陶器皿			6.6	5Y8/1 灰白色	高台部分1/4残存 内外面にひつつき痕 内外面底部以外を薄く刷毛塗り施釉 胎土密 焼成やや甘い

付表4 SG24新出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
118		土師器椀A	13.5	2.8		2.5Y8/1 灰白色	1/8残存
119		土師器椀A	13.7	2.6		2.5Y8/2 灰白色	4/5残存 口縁部に煤附着
120		土師器椀A	13.8	2.9		10YR8/3 浅黄橙色	ほぼ完形 胎土なめらか 雲母微細粒含む 内面底部ハケメ調整
121		土師器椀A	13.9	2.5		5Y8/1 灰白色	5/6残存
122		土師器椀A	13.9	2.8		10Y8/1 灰白色	1/5残存
123		土師器椀A	14.2	2.8		2.5Y8/1 灰白色	1/4残存
124		土師器椀A	14.2	2.8		10YR8/1 灰白色	1/4残存
125		土師器椀A	14.4	2.7		7.5Y8/1 灰白色	1/4残存 雲母微細粒含む
126		土師器椀A	13.9	3.4		5YR8/2 灰白色	9/10残存
127		土師器椀A	14.2	2.8		2.5Y8/2 灰白色	4/5残存 雲母微細粒含む
128		土師器椀A	14.2	2.6		10YR7/2 にぶい黄橙色	ほぼ完形 外面底部に墨書あり「阿古継」
129		土師器杯A	15.3	3.1		5YR8/2 灰白色	1/6残存 外面ケズリ調整
130		土師器杯A	15.1	2.9		7.5Y8/1 灰白色	5/6残存 内面底部ハケメ調整
131		土師器杯A	15.5	3.1		2.5Y8/2 灰白色	3/4残存 雲母微細粒含む
132		土師器杯A	16.3	2.7		10YR8/1 灰白色	1/8残存 内面底部ハケメ調整
133		土師器杯A	16.0	3.1		5YR8/2 灰白色	2/3残存
134		土師器杯A	16.2	3.1		10YR8/2 灰白色	口縁部3/4残存 歪み大きく口径不安
135		土師器皿A	14.0	1.8		2.5Y8/1 灰白色	口縁部は2/5残存 外面底部に墨書あり
136		土師器皿A	14.0	2.1		2.5Y8/1 灰白色	3/5残存
137		土師器皿A	14.7	2.1		2.5Y8/2 灰白色	5/6残存

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
138		土師器皿A	15.0	2.0		10YR7/2 にぶい黄橙色	3/4残存(主に底部) 灯明皿 内面底部 口縁部内外面に煤付着
139		土師器皿A	15.0	1.9		7.5Y8/1 灰白色	1/4残存
140		土師器皿A	15.1	1.7		5Y8/2 灰白色	1/6残存
141		土師器皿A	14.6	2.0		2.5Y8/2 灰白色	2/3残存
142		土師器杯B	16.6	3.9	8.0	10Y8/1 灰白色	1/5残存 外面ケズリ 内面底部ハケメ調整 高台は貼り付け
143		白色 無釉陶器碗	16.0	5.2	7.4	10YR8/2 灰白色	1/3残存 外面ナデのち回転ミガキ 内面ミガキ不明
144		白色 無釉陶器碗			6.3	5YR8/2 灰白色	高台部は完形 焼成甘い
145		須恵器鉢	23.8			10Y8/1 灰白色	口縁部1/4残存 焼成甘い
146		須恵器碗			6.0	10Y7/1 灰白色	高台部1/3残存 高台は糸切り未調整 焼成良好
147		須恵器碗			5.9	7.5Y8/1 灰白色	底部はほぼ完全に残る 焼き甘く白色 底部は糸切り未調整
148		須恵器蓋	13.6	1.8		5PB7/1 明青灰色	3/5残存 転用碗 内面は摩滅し墨が付着する 外面天上部へ ラオコシ 外面にも墨が付着する
149		須恵器壺			4.0	5PB6/1 青灰色	1/4残存
150		緑釉陶器 把手付壺				N5/0灰色 釉 濃緑色	1/6残存 復元高21.6 外面ミガキ密 釉厚 内面薄く釉が付着 東海系
151		緑釉陶器碗 東海系			7.2	10Y3/1 暗オリーブ色	底部1/3残存 全釉 内面陰刻花文 高台内にトチン痕あり
152		緑釉陶器碗 東海系			8.4	7.5Y3/2 暗オリーブ色	高台部1/3残存 全面ミガキ 全釉 陰刻花文 高台内にトチン痕あり 高台は貼付け
153		灰釉陶器碗	16.8	4.3	7.8	5RP7/1 明紫灰色	高台部4/5残存 内面薄く刷毛塗り施釉 降灰あり 外面は無釉 高台は貼付け
154		越州窯 青磁碗	14.4			N8/0 灰白色	5×4cmほど残存 小片のため口径不安
155		越州窯 青磁碗			7.8	7.5Y7/1 灰白色	高台部1/4弱残存 胎土密細粒、釉は厚い 高台端面は露胎
156		越州窯 青磁碗			6.2	10Y8/1 灰白色	5×3.5cmほど残存 釉は透明性大 外面底部釉カキトリ
157		白磁碗			6.7	白色	高台部1/5残存 高台部露胎 釉は透明

付表5 Pit25出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
158		土師器皿A	10.1	1.3		5YR8/2 灰白色	ほぼ完形、歪み大きい
159		土師器皿N	10.8	2.0		2.5Y8/1 灰白色	完形
160		土師器皿N	15.0	2.8		2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形
161		土師器皿N	15.4	2.7		2.5Y7/2 灰黄色	4/5残存

付表6 SA11出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
82		越州窯青磁 椀			5.2	胎土10Y8/1 釉 10Y7/2 オリーブ灰色	胎土密 細粒 高台底部以外全釉 内外面にメアト 外面底部ケズリ内面体部 の立ち上がりに稜を持つ
83		越州窯青磁 香炉	11.8			5PB8/1明灰色 釉 やや透明感 オリーブ灰色	口縁端部の残る身の破片 口縁下段胴部に凸帯をめぐらす 脚部に透かしは確認できず

付表7 SD09出土掲載土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
85		弥生土器壺				7.5YR8/2 灰白色	胎土粗 砂粒多い 外面に格子状の櫛目

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうさん・ろく・ななちょうあと							
書 名	平安京右京三条一坊三・六・七町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-5							
編著者名	本 弥八郎・平尾政幸・山口 眞							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼう 三条一坊 さん・ろく・ななちょうあと 三・六・七町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのかきょうおぐらちょう・ 西ノ京小倉町・ ほしがいけちょうちない 星池町地内	26100		35度 00分 26秒	135度 44分 36秒	2000年11月 1日～2000 年12月22日	400㎡	区画整理
				35度 00分 27秒	135度 44分 37秒	2001年12月 20日～2002 年2月28日	508㎡	
				35度 00分 26秒	135度 44分 32秒	2002年1月 21日～2002 年4月12日	162㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 三条一坊 三・六・七町跡	都城	弥生時代	なし	弥生土器壺				
		平安時代前期 ～中期	建物・溝・築地・ 土壇・園池・路面	土師器・須恵器・黒色 土器・白色無釉陶器・ 緑釉陶器・灰釉陶器・ 輸入青磁・輸入白磁・ 瓦類・土製品・木製品 ・金属製品	右京職の西北限、穀 倉院の南限を確定。 条坊の確認。西三条 第推定地で園池の検 出、池跡より紀年銘 のある題箋が出土。			
		平安時代後期 ～鎌倉時代	溝	土師器・瓦類				
		江戸時代	溝・柵列・土壇	土師器・陶器・磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5
平安京跡右京三条一坊三・六・七町

発行日 2002年5月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961